

# C E L

Culture,  
Energy  
&  
Life

vol.  
**106**

March 2014

特集／ソーシャルって何？

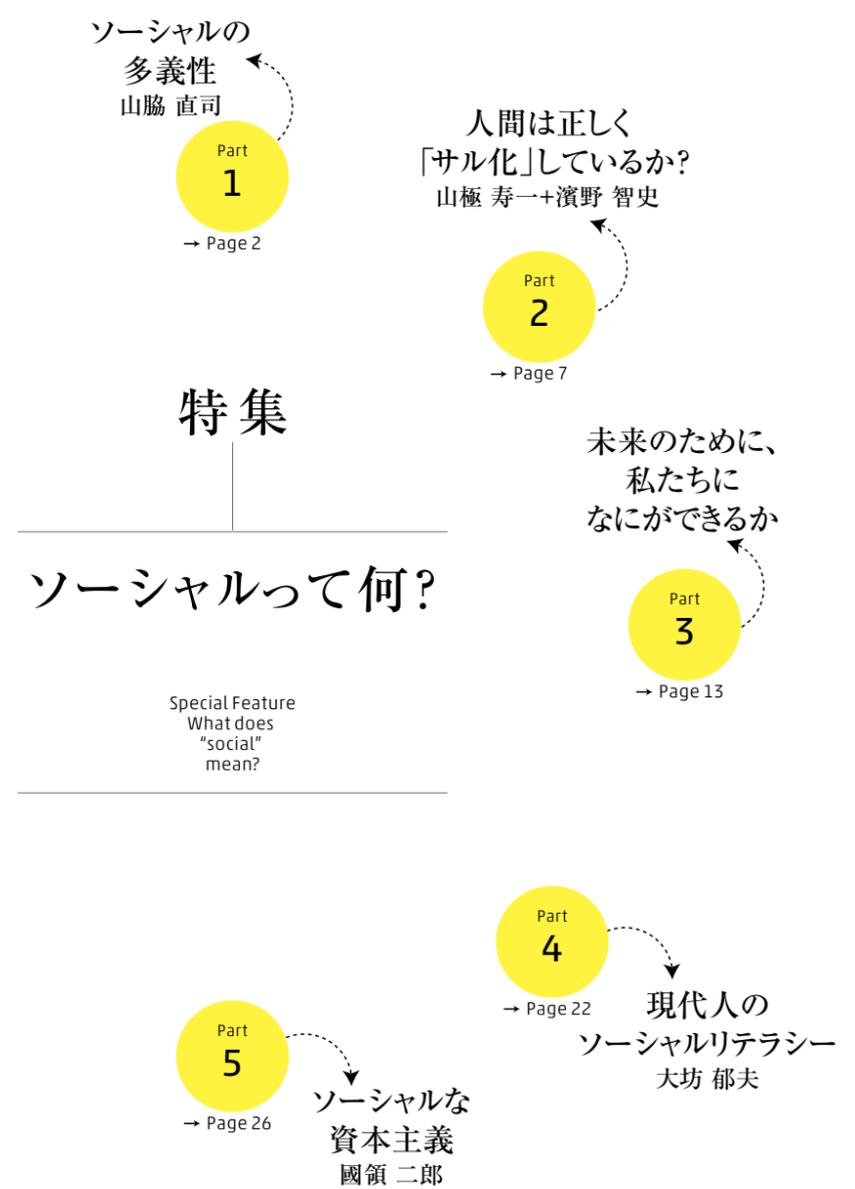


# 特集／ソーシャルって何？



いま、巷には「ソーシャル」という言葉があふれている。それなのに、ソーシャル／socialとは何なのかを問うと、必ずしも明確に答えられない人が多いのではないだろうか。日本語の「社会」「人と人とのつながり」「絆」といった言葉と近いようでもあり、また違った感覚で使われていることも多い。ソーシャルの意味をしっかりと捉えなおすことで、現在の生活や成熟した持続可能な将来のために、それがどのような効用、あるいはリスクをもたらすのかを考えていきたい。

- ソーシャルエンジニアリング (Social Engineering)
- ソーシャルデザイン (Social Design)
- ソーシャルメディア (Social Media)
- ソーシャルネットワーク (Social Network)
- ソーシャルブレインズ (Social Brains)
- ソーシャルアドバタイジング (Social Advertising)
- ソーシャルプラットフォーム (Social Platform)
- ソーシャルグラフィ (Social Graph)
- ソーシャルクラスタ (Social Cluster)
- ソーシャルステータス (Social Status)
- ソーシャルゲーム (Social Game)
- ソーシャルストーリー (Social Story)
- ソーシャルデザイン (Social Design)
- ソーシャルメディア (Social Media)
- ソーシャルネットワーク (Social Network)
- ソーシャルブレインズ (Social Brains)
- ソーシャルアドバタイジング (Social Advertising)
- ソーシャルプラットフォーム (Social Platform)
- ソーシャルグラフィ (Social Graph)
- ソーシャルクラスタ (Social Cluster)
- ソーシャルステータス (Social Status)
- ソーシャルゲーム (Social Game)
- ソーシャルストーリー (Social Story)



## Column & Essay

衣食住遊	「和食」を支える地方野菜	向笠 千恵子	40
季の恵み	春から初夏へ／代謝を促し、体調を整える	三浦 俊幸+川口 澄子	

## CEL Insight

CEL Output Part 1	機械と生命のパラダイム／前編	鈴木 隆	42
CEL Output Part 2	人と自然がつながる住まい	加茂 みどり	46
人間力を育む次世代教育 第三回	住まいを活きた教材とする住教育の役割	碓田 智子	50
エネルギー講座 第九講	家庭や地域の創エネルギー	下田 吉之・当麻 潔	54
エネルギー講座 第十講	将来へ向けてのシナリオ	下田 吉之・当麻 潔	58
CELからのメッセージ	タテ・ヨコ・ナナメ	木全 吉彦	64

# ソーシャルの多義性

## その概念史的考察

YAMAWAKI Naoshi

山脇直司

今日、ごく一般的に使われる「ソーシャル(social)／社会的」という言葉。これは、そもそも何を指し示し、時代とともにどのように理解されてきた概念なのか。ここでは、政治思想や経済との関わりから、この言葉の辿った歴史を概観し、近年台頭めざましい新しい「ソーシャル」概念までを追ってみたい。

### 中世



スコラ学の黄金時代を築いた思想家

#### トマス・アクイナス

Thomas Aquinas  
1225? - 1274

イタリアの神学者、哲学者、聖人。信仰と理性との統一総合を目指したスコラ学の大成者。ナポリ、パリ、ケルンの各大学に学び晩年はナポリの神学教授を務めた。著作は膨大かつ多岐にわたるが、最大の著書は3部からなる『神学大全』。

「ソキエタス(societasの語源)」を「何らかの完全性へ向かう人々の集まり」と理解する

### 19世紀～20世紀前半



ドイツ統一を果たした「鉄血宰相」

#### O.E.L.F. フォン・ビスマルク

Otto Eduard Leopold Furst von Bismarck  
1815-1898

ドイツの政治家。プロイセン首相となり、軍事力中心のいわゆる「鉄血政策」で普墺戦争に勝利するとともに、国内紛争(プロイセン憲法紛争)を収拾し、さらに普仏戦争に勝利してドイツ統一を完成し、ドイツ帝国初代の宰相となった。

国家主導による「社会的国家」を実現する

### 19世紀～20世紀前半



日本の経済学形成に大きく貢献した学者

#### 福田徳三

Fukuda Tokuzo  
1874-1930

経済学者。明治期にドイツに留学し経済学のほぼ全領域にわたって研鑽を積む。帰国後、東京高等商業学校(現二橋大学)等で教鞭をとり、多くの優れた弟子を養成。マルクス経済主義には批判的で、独自の厚生経済学の体系も構想した。

「社会」を「人格が自己実現のために非人格的なものに抵抗する運動の場」と捉える

## 「ソーシャル」を論じた人びと

中世から現代まで、さまざまな時代の局面で語られ、論じられた「ソーシャル」。本稿の中で取り上げるおもな人物と、彼らの語る「ソーシャル」を時系列に沿って紹介する。

### 20世紀後半



現代社会の危機の根源を問うた哲学者

#### ハンナ・アーレント

Hannah Arendt  
1906-1975

政治思想家、哲学者。ドイツ生まれのユダヤ人で、ナチス政権成立後、パリ、さらにアメリカに亡命。アメリカ国籍取得。著書に『全体主義の起原』『人間の条件』など。ナチス戦犯裁判の報告「イエルサレムのアイヒマン」では多くの論争を巻き起こした。

「社会的なもの」の肥大化によって、人間の「公共的」な活動力はますます衰えると論じる



自由の尊重を特に重視した経済学者であり、思想家

#### フリードリッヒ・A・フオン・ハイエク

Friedrich August von Hayek  
1889-1992

オーストリアの経済学者。研究領域は経済理論・政策だけでなく、科学方法論、法哲学、社会思想など社会科学の広範な分野に及ぶ。貨幣的景気理論を展開。資本理論を純化させ、また自由主義経済政策を主張。1974年ノーベル経済学賞受賞。

「社会的」という概念は意味が極めて曖昧な「ぼかし言葉 (weasel word)」にすぎず、不適切なだけでなく有害と論じる



「鉄の女」と呼ばれた意思強固な政治家

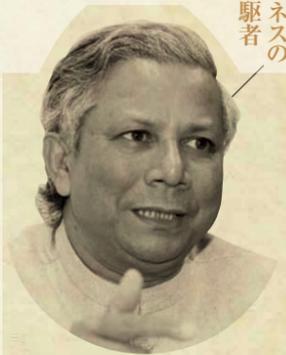
#### マーガレット・H・サッチャー

Margaret Hilda Thatcher  
1925-2013

英国の政治家。1975年、女性初の保守党党首に選ばれ79年首相に就任。国民に自助努力を訴え、政策の主眼を福祉国家から自由主義経済国家への復帰においた。労働組合に攻撃を向け「小さな政府」を目指し国有産業の民営化をはかった。

「社会」というものは存在しない  
(There is no such thing as society.)」を公的に発言

### 21世紀



金融を介したソーシャル・ビジネスの先駆者

#### ムハマド・ユヌス

Muhammad Yunus  
1940-

バンクラテシユの経済学者。貧困層の経済的自立支援を目指し、少額融資(マイクロクレジット)専門の「グラミン銀行」を1983年に創設。以後、各国でこれに触発された活動が起きた。2006年グラミン銀行とともにノーベル平和賞受賞。

社会的貢献や社会問題解決と利潤追求の両立という新しい「ソーシャル」を実践





という概念は、競争的な市場経済とは相容れず、社会主義に道を開く分配的正義を意味するが故に、自由主義者は拒否すべきである〔致命的な思いがかり〕1988年。そして、このようなハイエクの思想は、彼の弟子を自任していた英国首相マーガレット・サッチャー（1925〜2013）をして「社会というものは存在しない（There is no such thing as society）」と公的に言わしめることになった。

## ソーシャルの新たな台頭

しかし、こうした1980年代のハイエクやサッチャーの発言にもかかわらず、1990年代以降、「ソーシャル/社会的」という概念は英語圏でも急速に広まるようになった。それは特にCSR（企業の社会的責任）、SRI（社会的責任投資）、ソーシャル・ビジネスなどの概念と深く結びついている。これらはかつてアメリカの経済学者ミルトン・フリードマン（1912〜2006）が述べた「私的企業の唯一の倫理は株主のために利潤を追求すること」という企業観を打破して、社会に対する責任や貢献と利潤追求を両立させようとする新しい企業観に立脚している。

中でも、ムハマド・ユヌス（1940〜）が始めたバングラデシユのグラミン銀行をモデルとするような「ソーシャル・ビジネス」は、ハイエクならば語義矛盾と受け取るであろう概念であり、有料のサービス提供を行うつつ社会貢献と社会問題解決をめざすような公共性を担うという点では、アーレントの狭い公共論を打破する概念だと言つてよい。日本でも広まったソーシャル・ビジネスが、東日本大震災からの復興のためにどのような公共的役割を果たすのか注目されよう。

## ソーシャル、パブリック、リベラルの相互連関

かくして、アーレントの思想と異なり、現代ではソーシャルとパブリックは必ずしも対立的な概念ではなくなったし、実際にドイツ

ソーシャル・ビジネスは、社会問題のための根絶的なビジネスと利他的なビジネスと考えられる  
—ムハマド・ユヌス



Muhammad Yunus

の社会的国家という概念は最初からその両立をめざしている。確かに現代でも、経済学における「ソーシャル・チョイス・セオリー/社会選択論」（アマルティア・センや鈴木興太郎などがその論客）と「パブリック・チョイス・セオリー/公共選択論」（ジェームズ・ブキャナンや加藤寛などがその論客）の対立などが見られるものの、それはどこまでも学問界での対立ないしライバル関係にすぎない。また「ソーシャル・ポリシー/社会政策」と「パブリック・ポリシー/公共政策」の概念の違いは、現在では微々たる違いになったように思える。実際、私が専門とする公共哲学的な観点からみれば、社会的問題と公共的問題はほとんど同義と言つてよいだろう。

それに比べ、リベラル・マインド（寛大な心）という意味ではなく、思想的な意味合いでのリベラルとソーシャルの違いに関しては、やや複雑な事情が実在することを認識しなければならぬ。すなわち、アメリカでは、リベラルという概念が保守に對抗する中道左派的な意味合いを持つ一方で、ソーシャルという概念が政治や政策の領域ではなく企業の領域で用いられる。それに対してヨーロッパでは、ソーシャルが社会的公正や連帯という政治的意味を持つ一方で、リベラルは市場経済優先型の政治や政策を意味することが多いのである。自由市場を優先する「リベラル・ヨーロッパ」と人々の社会的公正を優先する「ソーシャル・ヨーロッパ」が対置される所以である。前述の「ソーシャル・マーケット・エコノミー」は、リベラルとソーシャルを融合した概念であるが、それでも、市場を優先するか社会的公正を優先するかで、ニュアンスが異なってくる。その意味で、今始まったばかりのドイツのCDU/CSUとSPDの大連立政権がどのような政策を遂行するのか、興味深い。

Yamawaki Naoshi

やまわきなおし/哲学者。1949年生まれ。一橋大学経済学部卒業、上智大学大学院哲学研究科修士課程修了、ミューンヘン大学にて哲学博士号取得。東京大学名誉教授。現在、星槎大学共生科学部教授。専門は公共哲学、社会思想史。「ヨーロッパ社会思想史」「公共哲学とは何か」「社会とどうかかわるか」ほか著書多数。

特集  
ソーシャルって何？  
その2

Special Feature  
What does "social" mean?



対談

動物学者

山極 寿一

情報社会学者

濱野 智史

長年アフリカでゴリラの社会の研究を続けてきた山極寿一と、

ソーシャルメディアから現代社会の研究に

取り組む濱野智史。

ふたりの対話からは、サルと人間をつなぐ

多様な「ソーシャル」のあり方が見えてきた。

人間は正しく「サル化」しているか？

胸をたたき、音を出す

「ドラミング」中のオスのゴリラ。

敵への挑発ではなく、相手に自分の興奮や好奇心を伝えるための社会的な行動だ。

（写真提供：山極寿一）

## 現代の象徴・

### 携帯と

### ソーシャル

### メディア

#### section 1

濱野 ここ3、4年、ソーシャルという言葉が急にいろいろな場所で見られるようになりましたが、やはり背景にはソーシャルメディア、フェイスブックやツイッターの隆盛があると思います。山極先生はソーシャルメディアは使われていますか。  
山極 やらないですね。そもそも携帯電話も持っていないんです(笑)。  
濱野 そうなんですか！  
山極 面と向かって話しているときに携帯を優先する人がいますが、優先順位が逆じゃないかと思います。対話という直接的なコミュニケーションで対峙しているのに、電話の向こうの世界を優先して、こちらの世界にいないという不在感がある。

つい最近までは、直接対面して話すということは非常に重要なことでした。だから、面接や商談が重視された。お互いの気持ちを通じさせる、最良の手段だったわけです。でも、今という時代は、むしろそれを避けようとしているようにすら思える。顔を合わせない方が自分のイメージもコントロールできますしね。  
濱野 現代人の防衛機構かもしれません。2013年にアメリカで流行ったのは「セルフイー」と言って、携帯で自分の顔を撮ってネットにアップすることです。まさに、自分のイメージをコントロールしようという意識が表れたものだと思います。

山極 今は、自己実現、自己責任の時代と言われていますが、携帯はその象徴です。他人を使って実は自分と対話しているのが携帯だと思ふ。携帯がない時代の人たちは、まさに他人の目や声を通じて自己を確立していたわけです。でも、携帯があると、他人と会わなくてもよくなる。携帯でメッセージやら何やらが入ってきて、自分がひとりじゃないということを確認しつつ、実はすごく内向きになっているんじゃないかと思ひます。

濱野 社会学でも、ギデンズという人が、現代は再帰性が上昇している時代だと言っています。携帯だけではなく、若い人がなぜソーシャルメディアを使うかということを考えると、彼らにはどっしりとしたアイデンティティがないからだと思ひます。確固とした自我がないから、周りの友人との関係性を通じて自我を作り続けなければならないのかというのと、子どものときからずっと人間と一緒に生活するんだそうです。そうすると、子どものライオンやトラは、飼育員を親の仲間だと思つて咬まない。少なくとも群れを作るような動物というのは、社会性、関係性を作ることができるんだと思ひました。

山極 私の先生の先生である今西錦司は、『生物の世界』(1941年)で、社会はすべての生物にあると宣言しました。それまで社会は人間だけのものだと思われていた。なぜなら、言葉が社会を作ると考えられていたからです。

濱野 理性を持つものだけが社会を持つということですね。  
山極 今西さんは、社会とは、個と個がコミュニケーションを取り合う空間、ネットワークであると定義しました。個体を認識し合えるとすれば、人間でなくともそこには社会があるというわけです。そしてニホンザルを観察した結果、個体識別していることがわかり、サルにも社会構造があるという結論に達したわけです。

## 真でも偽でも ありうる視覚

#### section 3

山極 サルや人間が社会を作るうえで特に重要なものは何だと思ひますか。  
濱野 何でしょう？  
山極 視覚です。鳥だったら音声で識別し合えるかもしれない。でもサルや人間は、視覚で個体を識別できる要素がないと、そこにソーシャルなものを感じできないんです。つまり、社会のおおもとは視覚がある。

濱野 なるほど。ではフェイスブックというのは、人間がサル時代からやっていることの延長でもあるわけですね。

山極 しかも、個体識別には顔が大事なんです。顔でお互いの関係を見分けている。関係の集積というのはひとつの構造、つまりネットワークになります。フェイスブックもそうなんだと思ひますね。  
濱野 フェイスブック、日本語にするとまさに、「フェイス＝顔」の「ブック＝本」、つまり顔の集積です。

山極 フェイスブックのようなサービスが流行る理由はなぜか。視覚情報をきちんと確認しながら他人と付き合うのには、移動のコストや時間がかかります。それを省くために、通信手段や映像を使っ



Photo by Kira Arita

ばいけない。逆に、山極先生のような世代ですと(笑)、ソーシャルメディアをやっていない人が多い。それはよく、ITリテラシーがないからという説明がされるんですけど、それは違うと思ひます。そこで自我を作る必要がないから、やる必要もないんですね。

## 社会を持つのは 人間だけ ではない

#### section 2

濱野 山極先生の本に、ゴリラを人間に馴れさせる「人づけ」という言葉が出てきました。あれはどうやってやるんですか？  
山極 要するにストーカーです。ずっとゴリラのそばにいて、彼らに人間を受け入れさせる。

濱野 ゴリラたちを、人間がいるという状況に馴れさせるわけですね。  
山極 空気のような存在、向こうに関心を持たれなくなるのが一番いい。

濱野 なるほど！

山極 これが大変なんです。今アフリカのガボンへ調査に行っていますが、馴れられるまでに、2002年から2012年の間で、実質8年かかりましたからね。イライラしてこちらを攻撃してくることもある。ほくもメスに襲われて、頭と足を咬まれて、頭5針、足17針縫いました。ただ、ほくの誇りは、体の前面を咬まれたことです。逃げ出していたらおしりを咬まれるでしょう？ 逃げずに咬まれたんです。まあ、負け惜しみですけどね(笑)。

濱野 (笑) テレビで見たんですが、メキシコに、ライオンやトラを飼い馴らしている施設があるそうですね。どうやって飼い馴ら

て仮想的な視覚的空間の中でネットワークを作っているわけですから実は、昔とやっていることはあまり変わらない(笑)。ただ、落とし穴もあると思ひます。われわれは、視覚情報はリアリティが高いと普段思っているけれども、意図的に作ることもできるものなんです。

濱野 でも、感覚の中には作れないものもありますよね。

山極 その通りです。例えば、嗅覚や触覚は作ることが非常に難しい。だから、実はそちらの方が信頼性が高いんです。仲のよいサル同士がどういふコミュニケーションをするか。グルーミングです。グルーミングというのは、接触、すなわち触覚によって気持ちや態度を確認し合う行動と言えます。あるいは、においも自分で操作できない。例えば、ゴリラは緊張すると、腋の下のアポクリン腺から特有のにおいを出します。興奮したことがにおいによって隠せなくなってしまう。でもそれは、情報としてはとても正直なものなんです。

濱野 嘘をつけないわけですね。  
山極 でも視覚情報は、見えないふりをするとか、怒ったふりをするとか、自分で操作することができます。サルは、自分では操作できない嗅覚や触覚によって、コミュニケーションの信頼性を担保しているとも言える。

## 人間は 困っている人を 助けずには いられない存在

#### section 4

濱野 ところで、ちょっと前まで「ソーシャル」と言うと、他人のために何かしてあげるといふイメージがありましたよね。社会福祉、社会主義の「社会」です。

山極 かつてソーシャルという言葉



Photo by Kira Arita

個体を認識できるとすれば、人間でなくともそこには社会がある  
— Yamagiwa Juichi

フェイスブックは、人間がサル時代からやっていることの延長でもある  
— Hamano Satoshi

には、自分の欲を抑制してでも相手の喜ぶ姿が見たいというニュアンスが、どこか流れていた。それが現代では、個人の利益を最大化するために集まるということがソーシャルになってきているのではないかと思うんですね。それもひとつのソーシャルのあり方だとは思いますが、個人主義的ですよ。その二つは相容れないものがあると思う。

**濱野** 19世紀、20世紀に、「社会主義」とか「社会党」といったような意味で使われていたソーシャルは、今のソーシャルという言葉をめぐる状況からはかなり抜け落ちてきているような感じがします。企業がソーシャルと言うときにはそういうニュアンスもあると思うんですけど、そういう言葉の重みはだいぶ抜けて、個人が気軽に参加して、というような意味に置き換わっているのは事実です。

**山極** サルの社会というのは、個人の利益を最大化するために集まったものです。ニホンザルの社会であれば優劣があつて、ケンカをしないように劣位のものが必ず引くようになってくる。でも人間というのは、何かしてあげれば必ずお返しがある、何かをもらったらお返ししなくちゃいけないという関係性があつて、それで地域社会というものが作られてきた。そして、だれか困っている人がいたら助けずにはいられないというのが人間だと思います。東日本大震災ではその感情で多くの人が動いたんですが、それが継続しているかという点、それでもなさそうなのが残念です。

## 社会と風土は切っても切り離せない

**山極** なぜ人間が集団を作つて生きていくか。それは、思い出、歴史を埋め込んだ風景なり場所が必要だからなんです。新しい空間に人間を集めただけでは社会は作れない。人々が生きてきた歴史があり、その上に人々の行動や関係性が作られているからこそ、安定的にソーシャルなものが続いていく。

**濱野** 新しく社会を作ろうと思ったらこんなに大変なのかということとを、東日本大震災は教えてくれました。

**山極** 社会と風土というものは、切っても切り離せない関係にあります。人間は死者とともに生きていて、祖先が里山や畑に息づいているからこそ、自分の身体がそこにある理由が見出せる。記憶が風

えてくると、直接知らない人もフォローしてくるので、炎上しやすくなる。

**山極** ソーシャルメディアの人間関係というのは、実は1対1の関係性です。ひとりから見ると、放射線状に友達がいる。でも、外から見るとネットワークになっているという奇妙な構造をしています。1対1の関係というのは、調整が利かないから炎上しやすいんですよね。

**濱野** なるほど、そうですね。

**山極** 1対1でも問題が解決しやすいのは、両者に格差がある場合ですね。相手を屈服させて、従わせる。これは炎上しにくい。でもお互いが対等だと、トラブルがあつたときに収拾がつかなくなる場合がある。

**濱野** ソーシャルメディアも、実は、一方ではだんだん規模を小さくする方向に進んでいます。

**山極** そうなんですか。

**濱野** アメリカで、友達を150人までしか登録できないSNSというのが出てきているんです。だれとでもつながれてコミュニケーションが取れるというのは、利便性もあるぶん、こわいなという認識も出てきたんだと思います。山極先生のお話をうかがっていて、まさに人間の本性に従った方向の進化なんだなという気がしました。それが全面化しているわけではないですけど、さすがに「ソーシャル万歳」という感じではなくてきているように思います。

## 現実で会うことを促進する

### ソーシャルメディア

section 7

**濱野** フェイスブックの創業者マーク・ザッカーバーグは「フェイスブックによつてプライバシーはなくなる」と宣言しています。もちろん、大げさなスローガンですが、ネット上に何もかも情報があれば、悪さもできなくなるし、プライバシーがないという前提で行動すればかえつてスッキリするのではないかという点です。

**山極** 日本はまさにそうなりつつありますよね。どこにでも監視カメラがあつて、監視カメラ社会というか……。

**濱野** だれもが公人になってしまう時代、それは、情報化、ソシ

「アラブの春」では、フェイスブックやツイッターなどのソーシャルメディアが運動拡大に貢献した。



写真提供 AP/アフロ

写真提供 AP/アフロ

2010年のチュニジア民主化要求「ジャスミン革命」を発端に、運動が他国にも波及した「アラブの春」。

土に植え付けられているんです。大震災では、風土が完全に破壊されて、何もかもが跡形もなくなつてしまった。そうすると、自分がそこにいる存在理由が根こそぎなくなつてしまうわけです。その恐怖に日本人は気づかされたんじゃないか。

**濱野** 大震災のときには、ソーシャルメディアでは善意が連鎖しやすいということを感じました。

**山極** 一時的なソーシャルなものがあるいろいろな立ち上がりましたよね。

**濱野** ソーシャルメディア関係の事例で言うと、クラウドファンディング（14頁参照）というものがあつて、震災からの復興にしても、今までであれば銀行からお金を借りたわけですが、クラウドファンディングではネット個人から少しづつ出資を募り、例えば年に1回、醤油屋さんであれば蔵の見学会なんかを催すわけです。募金だと1回だけで関係は切れてしましますが、出資という形だと関係性が継続します。

## ソーシャルメディアの人間関係、実は1対1

section 6

うのは160人くらいだという話があります。そのくらいなら顔と性格をきちんと覚えていられる。いわばひとつの集落の人数ですよ。狩猟採集民の基本的なムラの人数も160人くらいと言われているんです。でも、フェイスブックで、顔も名前もわかっていて、ネットワークをどのくらいまで広げられるのか。

**濱野** それはおもしろいテーマですね。フェイスブックでも、何百、何千という人となつていっている人もいます。百人くらいの人も多いツイッターの場合は、知り合いの範囲内で使つていけば阿吽の呼吸で盛り上げられるんですけど、それを超

ヤルメディアが押し進めてきた側面はあります。ただ一方で、フェイスブックは「フェイスブックはパーティ会場」、すなわち社交ソーシャルな場だとも言っています。

**山極** 欧米ではプライベートな空間というのは非常にしつかりとしている。だから、社交空間がプライベートと完全に区別される形で存在しています。ただ、日本はプライベート空間があまりはっきりしていない。

江戸時代の長屋なんて、ほとんどプライベートな空間はなかったんじゃないかな。

**濱野** 今の若者の間で起きているのは、どちらかという点で、長屋的なソーシャルという感じがします。

**山極** ルームシェアも流行っていますよね。

**濱野** ソーシャルメディアでおもしろいのは、結局ネット上だけでは満足できなくなつて、「オフ会」といって、実際の空間で集まり出すんです。大規模な例で言えば、脱原発デモや特定秘密保護法案反対の国会包囲などですが、ソーシャルメディアがない時代であれば、あんなに何万人も集まらなかったと思います。でも、ツイッターやフェイスブックでだれかがデモに行くを書いていたら、それほど政治的な意識がなくても、いつも書き込みを読んでいるあの人が行っているならと現地へ行つてみる。顔写真を普段見て知っているので話しかける。もともとソーシャルメディアで親しくなつていたので、現場で話してもスムーズにつながれるわけです。

**山極** ソーシャルメディアがリアルな空間で集まることを促す動きもあるわけですね。「アラブの春」なんかもそうなんですか。

**濱野** まさにそうだと思います。

**山極** 今は他人との付き合いがコンサート会場のようになっていられるかもしれない。深い付き合いをするわけではないけれど、一体感を共有している状態ですね。

**濱野** 社交が苦手な日本人でも、ソーシャルメディアのおかげで、見知らぬ人と会うときでもコミュニケーションが取りやすくなった。それはソーシャルメディアのポジティブな面です。

いろいろな社会学者が言っていますが、今は「多元的帰属」の時代とされています。脱原発デモのときはこういう自分、アイドルのコンサートではこういう自分というのがあって、ソーシャルメディアでいるいろいろな集団とつながっている。

## ソーシャルメディアにあふれる社会言語

section 8

山極 でも、ソーシャルって言うのも非常に文化的な感じがするんだけど、人間って、生身の体をなかなか乗り越えられないんですよ。実は基盤にあるのは、生物学的な身体と、生物学的な心なんです。それはずっと昔からあまり変化していない。現在のようにネットや機械の方へ寄っていくと、どこかで自然回帰的な動きが生じると思います。濱野 身体性が全くなさそうに見える匿名掲示板でも、実は流行るものは身体性なんです。例えば、打ち間違いです。思わずタイプミスして書いたような言葉が受けたりする。

山極 一見身体性とは関係ない空間なんだけれど、身体性が透けて見えてしまう。そこがおもしろいんですよね。濱野 あと、日本で特に発達しているものに、絵文字というものがあります。最近流行っているLINEというサービスではスタンプというものもある。

山極寿一氏とゴリラ。この距離まで近づくためにゴリラと社会性を築くには、何年もかかる。



写真提供 左右とも山極寿一

ゴリラの群れは10頭前後。細かい気持ちが察知し合える「共鳴集団」の一種。

のを突き詰めていくと、図形的な言語を使うことによって言葉の違いを乗り越えられるかもしれない。濱野 理性的なコミュニケーションは言語の壁が非常に大きいんですけど、感情レベルのものはだいぶ敷居が低いように思います。山極 「社会言語」という概念があります。言語自体には意味合いがないけれどもコミュニケーションに使われる言葉で、代表的なものがあいさつの言葉です。絵文字やLINEのスタンプもそうでしょう。今の状況は、社会言語を使うことが増えているということなのかなという気がしますね。濱野 ソーシャルメディアの空間では一気に増えていますね。暴力性を発露させないように、適切な関係性を保つために社会言語が使われているように思えます。

山極 社会言語は、ある意味でサルやグルーミングにも似ている気がします。そう考えると、人間は正しくサルになってきているのかもしれないですね(笑)。

山極 寿一  
濱野 智史

やまぎわ・じゅいち／動物学者、京都大学教授。1952年生まれ。ゴリラの研究から人類の起源に迫る研究を行う。著書に「ゴリラとヒトの間」「暴力はどこからきたか」「人類進化論」など。

はまの・さとし／情報社会学者、日本技芸リサーチャー。1980年生まれ。専門は情報社会論メデア論。著書に「アーキテクチャの生態系」「前田敦子はキリストを超えた」など。

クラウドファンディングで実現した「やんばる森のおもちゃ美術館」に展示される「スキコダマ」。材木の種類によってさまざまな表情を見せる。

特集  
ソーシャルって何？  
その3

Special Feature  
What does "social" mean?



# 未来のために、私たちができるか

社会的な課題は、発想力と行動力で解決する

クラウドファンディング →P.14

Case 1

中高生のためのケータイ・スマホハンドブック →P.16

Case 2

愛deer料理教室 →P.18

Case 3

今、私たちの生きている社会は、さまざまな課題を抱えている。便利な道具であるはずの情報端末が人間関係に与える影響、経済発展の陰で進んだ生態系の崩壊、過密な情報網に囲まれながら孤立しがちな現代人……。こうした課題を解決し、より暮らしやすく持続性のある社会を目指して行われている活動を紹介する。

Case 4

ネイパーフードデザイン →P.20

# 「群衆」の志と物語をお金に換えてできること

取材執筆／脇坂敦史

## クラウドファンディング



Photo by Naoki Kashiwa

「READYFOR」代表

### 米良はるかさん

近年、「クラウドファンディング」というサービスの名を聞くようになった。インターネットを介して不特定多数の個人から資金を集めるサービスのこと、世界中で急速に広まっているらしい。この手法を日本で初めて取り入れたサービス「READYFOR?」、クラウドファンディングによって目標額の資金を集めた事例として「やんばる森のおもちゃ美術館」を紹介する。

## 日本で初めてのクラウドファンディングサービス

アイデアだけの商品や企画段階の映画、ゲームなどの出資者を、インターネットで広く募る。あるいは、取材すべきテーマをジャーナリストが提示して必要な資金を集めたり……。新しい資金調達の手段として「クラウドファンディング」や「ソーシャルファンディング」といった言葉が聞かれるようになり、まだ日は浅い。

共同購入に近いものから、従来の寄付と変わらないもの、金銭的なりターンを求める投資に近いものまで手法や規模もさまざま。今、それを曖昧に定義しても、数年後には全く違うものになってしまいう可能性さえはらんだビジネスである。

日本初のクラウドファンディングサービス、「READYFOR?」を2011年に立ち上げた米良はるかさんがこの言葉と出会ったのも「クラウドファンディング」を看板に掲げたサイトがアメリカで目立ちはじめた2009年頃のこと。世界中で同時多発的に、似たような試みが行われようとしていたようだ。

「私がやろうとしていたのは、これだったかと驚きました。ちょうど、個人が自分の活動を紹介し、それを広く応援してもらうための『チアスパー』というサイトを立

ち上げたときだったからです」

無名でも頑張っている人たちに「投げ銭」のような形でお金を送り、応援する。それは、学生時代に「これをやる社会になる」と確信した米良さんの理想をそのまま形にしたようなサービスだった。

「でも、そのサイトは見る側にとって面白くなかった。頑張っている人たちがいるのはわかるけど、それだけで終わってしまう。つぎに何が起るのだろうか?というわくわく感が足りなかったんです。普通に、人が人を応援するような仕組みをウェブ上につくる。そのビジョンは必ず広まっていく、という確信がありました。あとは、どういう形を与えたら人びとの行

### Case Study 1

やんばる森のおもちゃ美術館  
沖繩の子どもたちに、木のおもちゃを届ける



#### 自然の宝庫に びったりの おもちゃづくり

琉球松など、地元やんばるの材木を用いたおもちゃづくり。必要な資金をクラウドファンディングで集めた。



木のぬくもりで  
いつばいの  
美術館が完成  
名前入り積み木のピ  
スをはじめこむこと  
支援者の物語も完結

写真提供=東京おもちゃ美術館

動が変わるかでした」  
アメリカで成功しているクラウドファンディングのサイトなども参考にしながら立ち上げたREADYFOR?は、どこが違うのだろうか? 「プロジェクトの担当者を、私たちはキュレーターと呼んでいます。実行者の方をお願いしているのは、なるべくわかりやすい目的を掲げ、そのお金で何をするかをはっきりさせること。従来の寄付などでも、そのあたりがわかりにくいというところは多かったんです」  
お金が集まれば、具体的に何を起こすことができるのか? 支援者の協力はどのように役立ち、リターンとして何をえることができるのか? そんなストーリーづくりやプレゼンの方法を一緒に考える。確かに、美術館や博物館のキュレーター(学芸員)にも似た仕事だ。

## 「雲」ではなく、 顔が見える「群衆」

2013年夏からREADYFOR?でスポンサーの募集を始めた「沖繩の大自然に『森のおもちゃ美術館』を皆で作ろう!」のプロジェクト。沖繩の国頭村と共同で姉妹美術館づくりを進めていた、

東京おもちゃ美術館の館長、多田千尋さんが呼びかけた。  
村の予算で建物は完成のめどが立ったものの、肝心の遊具をつくら買ったりするためのお金が足りなくなっていた。目標額は、READYFOR?でも過去最高の600万円だった。

沖繩で唯一、林業も行われている「自然の宝庫」、やんばるの森に木のおもちゃでいっぱいになる美術館をつくる。琉球王朝から続く祖父母と孫の交流を大切にしている伝統、そして古いおもちゃ文化を継承するような場所にした。さらに、台風で倒れてしまった樹齢300年の「蔡温松」を使った遊具で、子どもたちに遊んでほしい……。多田さんが地元の林業者や職人らとともに描いた情熱あふれるストーリーは、十分すぎるほど魅力的。あとは、「支援者にとつての物語」をどう紡いでもらえるか?

「できれば、支援者にも足を運んでもらえるような機会をつくりたい。そこで、ペアになった名前入り積み木の片方を美術館に飾り、もう片方を郵送する、という方法を多田さんと考えたんです。それなら、未完成の積み木をはめに沖繩へ行くという、すごくロマンチックなストーリーになると」  
地域振興など社会貢献をテーマ



Case Study 2

ケータイ・スマホ  
ハンドブック  
高校生自身で  
ケータイを  
見つめ直した本



スマホが  
加わった  
最新版

スマホを新たに  
取り上げ  
初出版化した

学習の深まりは生徒たちの  
興味・関心の深まりとなる。柔軟な  
発想で自ら見つけ出した新  
しいテーマが毎年追加され  
る。2014年版のテーマは「ネ  
ト選挙」。



ケータイハンドブック  
2009～2013年版

文章もイラストも  
すべて手作り  
歴代のハンドブック

生徒の意思を尊重した学び  
は教室にとどまらず、愛知県  
警サイバー犯罪対策課への  
訪問学習など、学校を飛び  
出し、フィールドを広げている。

イに加えスマホについても調べた。最新の第6版にはネット選挙がテーマとして盛り込まれる。生徒の皆さんに、ケータイと人との関わりについて考えていることを聞いてみた。

「趣味の仲間とはネットの方が深くつながれて楽しい。それでも実際に会う友達存在は違います」というのは2年生の中島さん。1年生の遠松さんは、メールのやりとりで友人とこじれてしまった経験も踏まえ、「会って話をすることが大事だと思いました」という。1年生のときから制作に関わっている3年生の田添さんは、「向かい合って話すことの大切さを知ってほしい」。

印象深かったのは、向かい合うことの大切さを話す彼女たちの言葉に、模索しながら考え、出した答えだからこそその力強さを感じ

れたことである。成長していく生徒たちの姿に、深谷昌一校長も頼もしさを感じているという。「取り組みを始めて6年、初期は熱を帯びた議論はありましたが、どこか排他的なところがありませんでした。しかし年を重ねていくうちに、生徒のグループが成熟していくのを感じました。今は、『こういうのもありだよ』と多様な考えを受け入れながら議論を深めるグループになっています」

これからの  
コミュニケーション

金城学院の取り組みの質の高さに誰よりも驚いているというのが、提案者の今津孝次郎先生だ。生徒たちがケータイ依存について調べたいと言いつつ、言い出したときに、ごく気軽にケ

ータイを使いこなしているように見える高校生たちにも「このままでもいいのだろうか」という不安や疑問があることを感じ、若い世代への見方が一面的だったことを反省したという。

「今はメディアコミュニケーションに振り回されすぎていると思います。2000年以上続いているヒューマンコミュニケーションに対し、メディアコミュニケーションはわずか30年くらいの、実験段階のようなもの。年長者は臆さず自分たちの知っているコミュニケーションを若い世代に教えればよい。そして同時に、メディアの新しいことは、若い世代から大人が教えてもらうのです」

若い世代から年長者へ。新しい方向のつながりを与えることで、コミュニケーションは深度を増していくかもしれない。

大人から若い世代、若い世代から大人へ。双方方向からつくる。これからのコミュニケーション。



愛知東邦大学／今津孝次郎先生



担当教諭／宮之原弘先生



校長／深谷昌一先生

つながるのはケータイとではなく、人

高校生の目線でケータイ・スマホについて説明するだけでなく、コミュニケーションのあり方に深く切り込んだハンドブック。その土台となる第1版が金城学院高等学校で作成されたきっかけは、2008年に中学校で出した「反いじめ憲章（現・白百合の誓い）」の取り組みに遡る。高い問題意識をもって活動してきた生徒たちの思いを受け継ぐ方法はないのか。高校の新年団は協議し、生徒支援を担当する宮之原弘先生が、「反ネットいじめ研究会」の立ち上げを呼びかけた。生徒たちの関心は

予想以上に高く、60人もの生徒が手を挙げた。最初の学習会で名古屋大学（当時）の今津孝次郎先生に「ケータイ問題」について講演を依頼し、その中で「ケータイをテーマに、1冊にまとめてみては？」との提案を受けて始まった。「ケータイ依存」について調べたいと言いつつ、生徒たちである。参加は自由、すべて生徒主体で学習が進められるなか、ハンドブック第1版が完成した。

宮之原先生は、学習を通して生徒たちが自身を振り返り、多くの「気づき」を得たと語る。「依存」が悪いのではなく、依存の対象がケータイであることに問題があると気づいた生徒たちは、次に依存の『原因』について関心を向ける

学びを通して  
グループは  
成熟する

これまで5版を重ねてきたハンドブックだが、毎年生徒たちが気になるテーマを加えている。例えば海外でのケータイ事情、東日本大震災の折には災害のなかでのケータイの意義。第5版ではケータイ

ようになりました」

人は誰かに依存しないと生きていけない。その対象は本来「人」。周りにいる親、よき大人とつながることが大切——その気づきを同級生や後輩に伝えるために、毎年4月には新しいハンドブックを作成・配布し、生徒による新生ガイダンスを行っている。



名古屋・金城学院高等学校  
1年生／遠松香里さん(上)  
2年生／中島日向子さん(中央)  
3年生／田添茜名さん(下)

高校生たち自身の手でまとめ、出版された『中高生のためのケータイ・スマホハンドブック』(学事出版)。

ただ「ケータイはダメ!」ではなく、多角的な視線でまとめられた1冊である。本書を編集した名古屋・金城学院高等学校の生徒先生のお話をうかがった。

取材執筆／加藤しのぶ 撮影／堀出恒夫

未来のために、  
私たちに何が  
できるか

Case

2

ケータイ・スマホから学ぶ人とのつながり



未来のために、私たちに何が出来るか

Case

3

シカ肉料理を通して生物・文化の多様性を守る

取材執筆/加藤しのぶ 撮影/喜多章



Photo by Naoto Kanahisa

「愛deer料理教室」代表

林真理さん

愛deer料理教室

生物多様性を脅かすシカ

背の高い木々は緑が生い茂っているのに、一定の高さ以下には草ひとつなく土がむき出し——今、そんな異様な森の姿が全国的に広がっているのをご存じだろうか。これは、ディアライン＝シカの口が届く高さ以下に生育する下層の植物が、シカによって食べつくされたことで見られる現象である。明治、昭和初期の乱獲で絶滅に瀕した際に取られた保護政策が平成19（2007）年まで続いたことや、オオカミなどシカを捕食する動物の減少などを背景に、近年シカの個体数は爆発的に増加し、生物多様性を脅かす存在となっ

いる。さらに、足りない餌を求めて人里に下りてきたシカがもたらす農業被害も億単位となり、年々深刻化している。農業被害額が全国でも上位に位置する兵庫県では、ニホンジカの生息数が15万頭弱に上り、生息範囲も県全域に広がっている。当年間3万7000頭以上、1日100頭を捕獲しなければ、増加を防げない現状である。そうして捕獲されたシカのほとんどが廃棄されている。（兵庫県森林動物研究センター横山真弓氏より）

林さんはその事実を衝撃を受けた。5年前、購読していた日本農業新聞にもシカの農業被害の記事が度々載り、関心を寄せていた折のことだ。外国ではジビエ（食材

「生物多様性——生きものたちの個性とつながり」の危機。聞き慣れないこの言葉を身近にひもとくキーワードのひとつに「シカ」がある。野生のシカを通して浮かぶ問題に、「食」の面から取り組んでいるのが、兵庫県で「愛deer料理教室」を主宰する林真理さんである。

として獲られた野生の鳥獣）として親しまれる高級食材のシカが日本では廃棄されている……どうにかできないだろうか。それまで料理教室を開いていた林さんの出した答えは、シンプルだった。「美味しいのに食べないともったいない。まずは美味しさを知ってもらおう」

その思いを形にしたのが「愛deer料理教室」。現在、毎月第4火曜日開催の「シカ肉を食べる会」をはじめ、各地で料理教室を開催し、シカを取り巻く現況を伝えつつシカ肉料理を広める活動をしている。

安全、高栄養、何より美味しい

体脂肪率わずか3%以下のシカ肉は低脂肪、高タンパク、鉄分豊富と栄養価が高いのが特徴だ。とはいえ、硬くて臭みが強いのは？

「新鮮で血抜きがきちんできていれば臭みはありません。ただ脂肪がほとんどないため、ワインに漬け込むなどしてしっとりとして食べられるようにしています」

野山を駆け回る野生のシカには感染症などの心配もほとんどないという。特に「愛deer料理教室」では、兵庫県策定の「ひょうごシカ肉活用ガイドライン」に沿って衛生的に処理された肉だけを推奨している。

野菜ソムリエの資格ももつ林さんが考案するレシピは、どれも野菜をたっぷり使い、やわらかい肉の食感と、シカ肉本来の味わいが楽しめるものばかりだ。

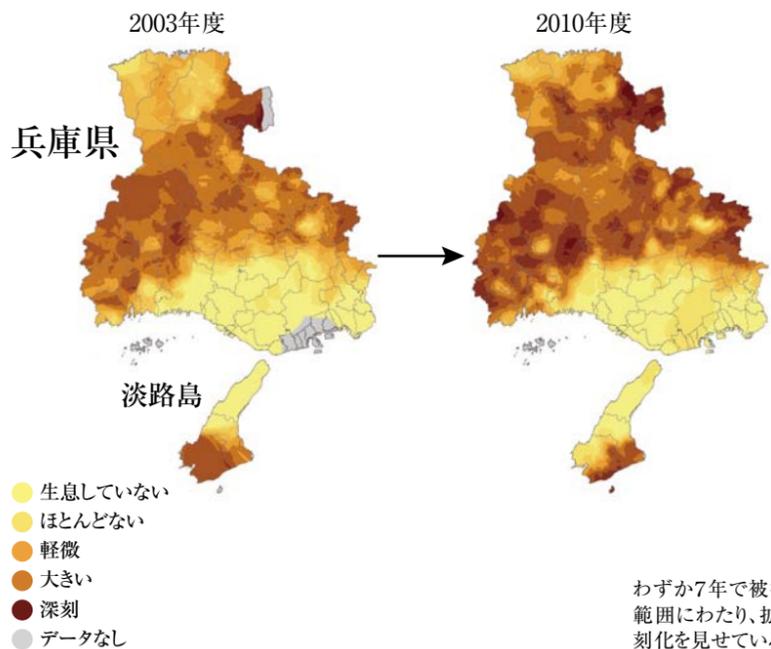
「シカ肉は現代の食の課題も浮き彫りにしています。例えば食品偽装などが問題になるなか、正しく処理された野生肉の方が安全ですし、化学調味料や濃い味に慣れた舌に、繊細なシカの味を覚えさせることは大事だと思っています」

「文化」として食へ継ぐ

林さんの活動の目的は、ただも

Data

兵庫県におけるニホンジカの農業被害最新分布図



わずか7年で被害は広範囲にわたり、拡大・深刻化を見せている。

（資料提供：兵庫県森林動物研究センター <http://www.wmi-hyogo.jp/>）

つたいないから食べよう」というだけのものではない。古来日本ではシカ肉を「もみじ肉」と呼び食する習慣があった。そうしたシカ肉の価値をいま一度高め、保護政策で途絶えてしまった、多様な食文化を次代に伝えることが何より大切だと考えている。まだまだ「ゲテモノ食」という見方がある。一方で、アレルギーで家畜肉を受け付けなかったがシ

カ肉は食べられて、「シカに救われた」という人もいる。いろいろな立場の人の話を聞くと「何が本来の自然だろう」と考えてしまうという。それでも、「食文化の多様性を伝えていきたい」という考えはぶれることがない。さまざまな反応を柔軟に受け止めながら、シカ肉のすばらしさを知ってもらいたいと願う林さんの活動は着実に広がっている。

Case Study 3

愛deer料理教室

野菜もたっぷり 林真理さん考案のシカ肉レシピ



自家製シカハムのラップロール



シカ肉とキノコのトマト仕立て

ラップロールはシカ肉の繊細かつ奥行きのある滋味を、トマト仕立てはワインに漬けたシカ肉のしっとりしたやわらかい食感を堪能できる。



手軽につくれる美味しい

身近なものばかりでつくられるのに味わいはシカならではのレシピに、参加者からは「食べても腹にもたれない」「臭みがなくて驚きました」と驚きの声。（料理教室は兵庫県主催・大阪ガス共催）

## A-standard

災害にも強い  
「よき隣人」のいる  
マンション



テーマや課題を  
決め、住民たちが  
集う場をつくる

育児や防災など、テーマに沿ったワークショップやイベントを頻繁に開催。「ご近所さん」と交流する楽しみもあり、参加率は高い。



交流が自然に  
生まれるような  
共同スペース

A-standard渋谷桜丘の「コモン・スペース」はエントランスに直結し、居心地のよいソファが路地に置かれた縁台のような役割を果たす。

未来のために、  
私たちに何が  
できるか

Case

4

課題解決のために  
つくる「適度なつながり」

ネイバーフッドデザイン

2011年の東日本大震災は、コミュニティの欠如による現代社会の危険性を浮き彫りにした。

しかし、しがらみの多いかつての

「ご近所付き合い」をすることも抵抗は大きい。

しがらみにもならず、孤独にもならない、

ちょうどよい近所つながりをつくるための事業

「ネイバーフッド(近隣)デザイン」が始まっている。

取材執筆／  
脳坂敦史

Photo by Natori Kazuhisa



HITOTOWA INC.

荒昌史さん

プライバシーと  
パブリック、  
両方が尊重される  
マンションを

集合住宅や街区における「近所付き合い」の新しい形を提案しているのが、HITOTOWA INC. (HITOTOWAは「人と和」の意)の荒昌史さんだ。それは古きよき「ご近所」へのノスタルジーではない。荒さんが提唱するのは、新たな関係性の構築を目指す「ネイバーフッドデザイン」である。「しがらみではない、でも孤独にもならない。そんな適度なつながりをつくる(＝デザインする)仕事だと思っています」

HITOTOWA INC.の事業は、コ

ミュニティづくりを意識した物件の開発や、管理のあり方の見直しといったコンサルティングが中心である。2013年に完成した集合住宅「A-standard」は、エントランス近くに居心地のよい「コミュニティスペース」を配した。そこで防災や子育てなどをテーマに、たびたびワークショップやイベントを開催し、住民同士の自然な交流を促す。販促用のパンフレットでも「good neighbors (よき隣人)」になるためのきっかけづくりをお手伝いします」と謳った。プライバシー重視というイメージのある分譲マンションでは、異例の試みといえるかもしれない。「プライバシーとパブリックの両

近所付き合いの  
本質は、  
課題の解決にある

最近、シェアハウスやソーシャルアパートメントなど、若い世代を中心に、個を重視しながらも、住まいに他者とのつながりを求めるニーズが高まっている。また、共通の趣味をテーマに据えた物件

もある。けれども、荒さんの意図は少し違うところにあるようだ。「近所付き合いの一番の本質は、災害時の対策や環境負荷の軽減など、課題の解決にあると思います。もちろん、人とつながること自体が楽しいのですが、それは近所じやなくてもいい。でも、有事の場合、いざというときに助け合えるか、あるいは、ものをシェアして、いかにして環境への負荷を軽減するかといった課題解決のためには、距離的な近さが重要です」

実際に「A-standard」の入居者からも、「災害があったときに頼れる人ができてよかった」といった感想が多く寄せられている。

2010年には「無縁社会」などという言葉もつくられ、翌年の東日本大震災後は「絆」がキーワードとなった。コミュニティや

ご近所の欠如は、不安の原因や乗り越えるべき課題にまでなっているといる。荒さんが「ネイバーフッドデザイン」を事業の中心に据えたきっかけのひとつも、やはり2011年の大震災だった。

「もともと大手住宅デベロッパーでCSRの仕事をしており、孤独死などの問題も起きている時代はどう集合住宅をつくるかを考えたとき、コミュニティが重要と考えようになりました。また、2005年から環境教育を行うNPOを運営しているのですが、例えば畑のある暮らしをしようといっても、地縁やご近所がないと長続きしないんです。そんななか東日本大震災を経験し、人のつながりが重要であると身をもって実感したんです」

事業の原点をそう話す荒さんに

とって、マンションにおける「ご近所づくり」は、この社会が抱えるさまざまな問題の解決に必要な「コミュニティの再生」と直接つながっている。

「もちろん、自治会や民生委員、NPOといったものの役割も重要。地域のお祭りやイベントといった切り口もあるでしょう。けれども行政は財政が逼迫していますし、自治会や商店会も高齢化が深刻です。若い世代も多い分譲マンションの住民が、積極的に地域コミュニティの担い手となり、これまでハードのみをつくってきた住宅開発業者が、人付き合いというソフトまで含めた「コミュニティ・デベロップメント」に関わるとしたら、その意味は大きいと思うし、私はその可能性に賭けたいと思っています」

近所付き合いの一番の本質は、  
課題の解決にあると思います。  
有事の場合、いざというときに  
助け合えるかは、  
距離的な近さが重要です。

Ara Masafumi



Photo by Natori Kazuhisa

# 現代人のソーシャルリテラシー

コミュニケーション力とツールの影響

大坊 郁夫



Daibo Kyo

だいほういくお／社会心理学者。北星学園大学教授、大阪大学大学院人間科学研究科教授などを経て、東京未来大学学長。対人コミュニケーションが専門。著書に『幸福を目指す対人社会心理学』（共著）、「しぐさのロマン（ケーシエ）」など。

## 2つの「社会」

まず、社会心理学的には、「社会」といったときに、大きく分けて2つの捉え方があることから考察を始めよう。例えば、「我々が今住んでいる社会」と表現する場合、日本社会とか、アジア社会といったものなどが考えられるが、こうした社会は、私たち個人の外にあって、その中には自分自身やほかの人も含めた対人関係や、集団や企業、環境や各種の構造などのすべてが含まれている。この大きな容れ物が社会だという捉え方である。この場合、その社会の像は個人にはなかなか見えてこない。これが「外にある社会」である。

一方で、我々の頭の中の社会というものがある。よく、「社会の目が怖い」とか「世間が許さない」といった言い方を耳にする。この場合の社会や世間とは、自分自身が深くコミットしている関係、または緩やかな価値を共有しているつながりのことを指す場合が多い。これが、「頭の中にある社会」、言い換えれば「内にある社会」である。これは、近いところでは自分の親や家族。それから育ってきた地域

や学校、あるいは自分にとっても影響を与えた中学校の先生とか、先輩、恋人。いずれもそれらの対象と自分とのつながり方が非常に気になる関係であり、そのつながり方が自分の頭の中にはつきりと描かれている場合が多い。

このように、我々の言う社会とは、外と内にあると捉えられるが、マクロな構造を問題とする政治学や社会学的見地からは、「外の社会」についておもに言及がなされるであろうし、個人と個人とのつながりの部分を重視する心理学的には、「内にある」社会のほうが、意味を持っている。この「内にある」社会を、「シグニフィカント・アザー——意味のある、価値のある他人」と言い換えることも可能である。自分に対してとても影響を与えた、規範を与えた人々、それらが動いている世界が社会ということになる。この前提に立てば、いくら我々が日本人であり、日本の伝統に根ざした習慣などがあって、多くの日本人はそれに影響を受けているといっても、自分の育ってきた家庭の中でそれがあまり意味を持っていなければ、その人にとって社会的意味を持つことにはならない。

また、その人にとって意味を持つ社会と意味を持たない

社会があると考えるが、「自分は何らかの社会の中の1人だ」と言ったときには、そこには意味のあるものもないものの両方がまじっている。外の社会という大きな容れ物の中にある大勢の人の中には、それぞれの「内にある社会」のある部分が重なり合う人も、まったく重なり合わない人もいるからである。個人

SNSやメールを介した現代の「ソーシャル空間」では、自由な交流の中でさまざまな新しい交流価値が生み出されている。

こうした場を上手に活用することが、生活の満足感や自己実現につながる可能性も高い一方、当事者たちに与える心理的影響、危険性についても指摘されている。心理学的アプローチから、これからのソーシャルリテラシーについて考えてみたい。

## 分断され、薄まりつつある対人コミュニケーション

さて、このように、ミクロな人と人とのつながりの積み

の生き方やパーソナルなものに大きな影響を与え得る「内にある社会」は人によって違っており、当然のことながら、社会認識もずれるのが当たり前である。これを、法律などのいろいろな約束事や、マスクミを通じて広まるような非常に緩やかな広い意味での価値観、そして何より、個人間のコミュニケーションで無理やりつなげているのではないだろうか。人は互いに、個人の頭の中にある社会観のずれや差を埋め、共有できる感覚や知識の共通項を増やすためにコミュニケーションを行い、その結果として、「外にある、構造を持つ

社会」を成り立たせているのだから。

上げの結果として、マクロな社会ができていく以上は、対人コミュニケーションの現状と課題について述べねばならない。

現在、社会における人と人とのつながり方は、どんどん二極化してきているようである。決して収束に向いているように見えない。

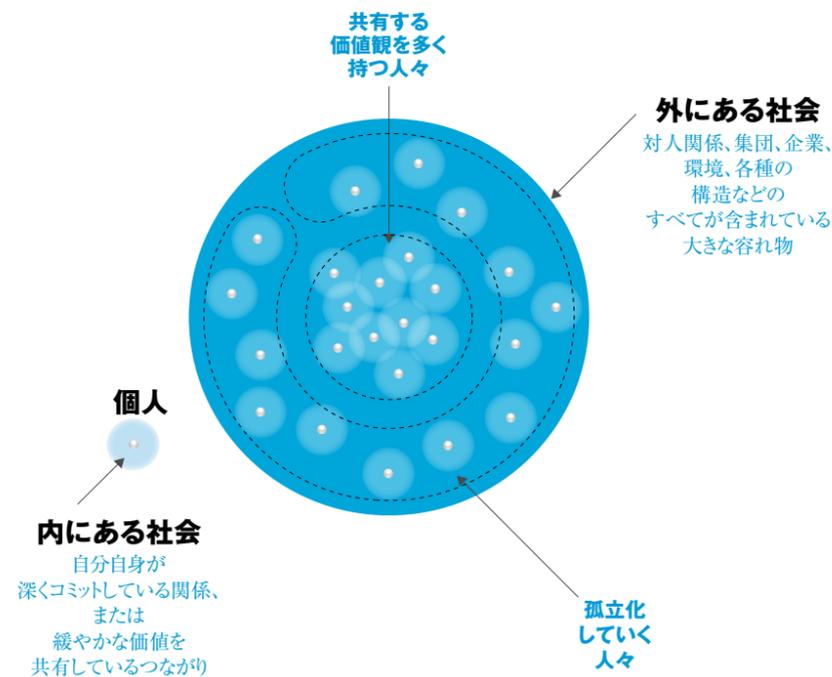
一方に、仙人のように、たとえ町の中においても全然人づきあいをしない人がいて、他方には、たくさんの人とつながりを持ちながらいろいろな活動をしている人がいる。この二者では、社会の持つ重みが全然違う。前者の人には社会はほとんど意味を持たないが、後者の人は、ちょっとしたことでも大きな影響を与え合うような、密度の高い社会を持っている。こうした人たちは、もとのつながりを離れてガラッと違う集団に入ることがないので、5年、10年たってもあまりその規範は変わらず、具体的な人の顔ぶれが少し変わったとしても、その人が持っている社会的な認識観というものが長く続いていく。そういう人たちはおそらく、次の世代、その次の世代にもつながっていくようなものを生み出す可能性が高いのではないだろうか。

それでは、前者の「人とのつながりを持たない人」がなぜ増えてきたのか。おそらくその背景には、第二次大戦後頃から、「個人」や「我」、「私」、あるいは「私らしさ」が追求されはじめたこと、そして、人と違うことが自分らしさだという、個性という言葉に対する誤解がもたらされたことがあるのではと考えている。

昔は、何らかの人生のパターン、モデルを提示する人がいたが、戦後になり、学校教師も親も、「おまえの人生、おまえで考えろ。みんなそれぞれ、自分の生き方だよ」と言うようになった。しかし、どうやってそれぞれの可能性を発揮していったらいいのか、どうしたらやり方を探せるか、という指導や教育がない。そのため、自分ひとりで悩み、右往左往し、自分らしさということを誤解して、とにかく人と違うことをやってみる。やってみても、似たような



## 二極化する人とのつながり方



世界でもっと頑張っている人がいると自信喪失になり、人とのつながりも持ちにくい人が増えたのではないだろうか。我々が例えば10のパーツを持っていたとすると、1から9までは一緒に10番目が違っているだけでもまったく別な人間になれること、無数の生き方があるということ、無理解できず、無理をして、人と共有できるようなことをすべて拒否してしまうことが、つながりを切る方向に向かわせているともいえる。

## 情報機器の進歩による影響

こうしたコミュニケーションのあり方の変化は、当然、情報通信機器の発展と切り離して考えることはできない。

面と向かい合っている生身の相手であれば、言葉、表情、身振り手振り、視線……非常に情報が多く、大量のエネルギーをお互いに注がないとコミュニケーションができないのに、それを中もわからず、テキストメールだったら、文字しか情報がない。目の前の生身の相手であれば、言葉、表情、身振り手振り、視線……非常に情報が多く、大量のエネルギーをお互いに注がないとコミュニケーションができないのに、それを中

途半端にしたまま、間接的なコミュニケーションのほうを優先的に行っているのは、一見、自分で情報をコントロールしているつもりでも、実は断片的な情報に支配されている、非常に中途半端な形といえる。

それから、ネット上のアドレスブックに、何百人ものストックがあったとしても、そのほとんどとは深い交流はないはずである。いざ連絡しようと思えばできる人間がいることだけで安心し、顔が見えない、なりすましさえも可能な相手をむやみに信じている人が増えたのではないだろうか。基本的な人との信頼関係そのものが、積み上げの人間関係への信頼ではなく、一種の情報への信頼へと変質しているのだろう。Facebookで、「いいね！」の数を競い、「いいね！」が多いことが一種のネット・マネーやマイレージのように評価されている風潮も同様で、浅い関係をたくさん持っているに過ぎない。

こうした、浅いつながりの形が増えることで、先に述べた二極化する人づきあいのうち、孤立化するパターンの増加につながる懸念されるのである。

ところで、2004年、長崎県佐世保市で小学6年の女兒が学校内で友人をカッターナイフで殺傷した事件がある。これは、ネット上の書き込みを根に持ったことも原因のひとつと言われるが、ネット上の断片的な言葉を拡大解釈しネガティブな意味に受け取るといった傾向は、そもそも、人間の心理がネガティブなことに対してはポジティブなものに對するよりも何倍も敏感だという原理に根ざしている。人間誰しも、自分が傷ついたり、嫌なことをされるのは避けたい。だから、それを排除し、自分を守るために、まず相手の言葉を否定的に捉えておいて、防衛しようとする。このやりとりがどんどん悪循環をして、炎上という現象が起るのである。同じ言葉を発している、対面の会話では目尻が下がってにこにこしているのと、目を三角にしているのでは全然結果が違うが、ネット上の言葉は、表情も何も持たない。言葉だけがすべてなので、ある意味で危険

## 現状維持ではなく変革へ

最後に、サステナビリティ (sustainability, 持続可能性) という言葉にも言及しておきたい。心理学では、この言葉には、自然環境と人との共生、人間同士の関係も含めて、こうしたものを大きく環境と捉え、それらがこれ以上失われないうちに、最低限保護するという意味が込められている。これ以上の崩壊を食い止めるための非常に緩やかな発想としてのサステナビリティである。

しかし、今あるものを保つだけでは一種の現状肯定に陥りがちである。私は、その先にもっと大きな変革、「増やすこと」も必要だと考えている。自然環境に例えれば、場合によっては今ある都会を潰して、そこに新たに100年後の緑の山をつくるようなことも辞さない、といったある程度の力業が必要だと思える。

現在、非常に分断された人間関係が多くなっているが、人の心を結ぶ豊かなつながりを今以上に失わないように働きかけることは、今ならば、やろうと思えばできる。さらに、薄い関係を減らして、もっと密度の濃い人間関係を、ある意味でつくっていかねばならないだろう。そういった変革を与えなければ、サステナビリティといっても、薄くなった現状しか残らないことになる。

そのため、社会がなすべきことというのは、非常にはっきりしている。「内なる社会」と「構造を持つ外の社会」。その2つが影響し合い、人々がそれぞれの well-being を実現できる、幸福を追求できる社会のために、先に述べたようなスキルアップのためのトレーニングや、個人の「内なる社会」を、人とたくさん重ねていけるような場をいかにしてつくれるかが、今後の重要な課題となるはずである。

なのである。

## コミュニケーション・トレーニング

## ——社会の持つ役割

コミュニケーションというものは、ステップを経て身につけるスキルであり、本当は子供のうちに遊びを通して身につけておくべきものである。身振り手振りも含めていろいろな種類のコミュニケーションがあるのに、現代人は、ネットの普及を大きな契機として、文字とそれを入力する指の動き程度しか能力を使えなくなりつつあるのではないだろうか。

人間関係が、コミュニケーション・スキルのアップとともに徐々に築かれていくものである以上、この能力低下は大きな問題である。本来できたはずの対人コミュニケーションの能力低下に、なんとか歯止めをかける方法はないのか。

近年、コミュニケーションの基本をもう1回考え、その能力を回復する必要があるということから、「コミュニケーション・トレーニング」等と呼ばれる試みが徐々に行われるようになってきている。一般社会人や大学生、まだそう多くはないが小・中学校でも、能力を取り戻すための実践として導入されつつある。

例えば、社会人を対象としたものに、2人組にして視線の使い方を自覚させるというプログラムがある。「最近のあなたの楽しかったことを相手の方にお話しして聞かせてください、そのときに相手の顔をなるべく見ないでください。それから、最近つらかったことを相手の顔を見ながら話してください」というふうに指示する。すると、目を伏せて楽しかったことを話していると、だんだん楽しくない方向に話が進んだり、逆に楽しいことだと思おうと、つい相手を見てしまう。

このように、言葉と視線がいかに連動しているかを学ぶ

# ソーシャルな資本主義

つながる経済とどう歩むか

國領 二郎



Kokuryo Jiro

こくりょう・じろう／慶應義塾大学総合政策学部教授。研究テーマの中心は経営情報システム。経営学博士（ハーバード大）。著書に『オープン・ネットワーク経営』（日本経済新聞社）、『オープン・アーキテクチャ戦略』（ダイヤモンド社）、『オープン・ソリューション社会の構想』（日本経済新聞社）など。

## つながる経済

スマートフォンに代表されるモバイルコンピューティングと、クラウドと呼ばれるネットワーク上に展開されたデータベースやサービスによって、あらゆる情報が結合される時代が到来しつつある（Chart 1）。

IT用語では分かりにくいので、もっと生活シーンに沿って例示してみよう。たった今、この原稿を書きながらスマートフォンに「ラーメンが食べたい」と問いかけてみた。するとただちに「現在地の周辺でラーメン店を17件調べました」と音声で返事があり、各店の口コミ評価つきの情報が表示された。よさそうなお店をタップすると地図が表示され、現在地からのナビゲートをするかと問いかけてくる。このようなことが可能なのは、情報が基本的にネットワーク上に構築されたプラットフォーム上に格納され、消費者の手もとにある、高機能の情報デバイスが常時接続されているからである。そして、GPSを搭載したデバイス側から位置情報と持ち主の希望が伝えられると、プラットフォーム側で、地図情報や店舗情報などが、ユーザーにニーズに応じて結合されて提供される。

いま一つ例示するなら、ここへきて急速に普及を始めている電子書籍は、利用者がどの本を買って、何ページまで読み進めたかを把握している。これによって、新しい端末に乗り換えても過去に買った本がいつでも読めるし、たと

把握することができるのに対して、書店で山積みで販売する時には誰が買ったか分からない匿名販売をしてきた。

このように考えていくと、今日われわれが当たり前だと思っている経済の仕組みは、匿名経済を支えるために発達してきた、比較的最近のものであることに気づく。たとえば今われわれが飲み物を買う場合に、規格化されたボトルに厳格に計量された量が詰められ、表にブランドのラベルが貼られ、自動販売機ではほぼ均一価格で売られている状態

匿名から、顕名へ。  
所有権移転モデルから、  
利用権ライセンスモデルへ。  
専有から、共有へ。  
「つながる」経済が、  
社会を、資本主義を、  
企業のありようを、  
変えていく。

を当たり前のように思っている。ブランドがなぜ必要か、なぜ規格化が必要だったか、なども普段は考えもしない。しかし、よく考えると、それらは匿名経済の中で欠乏しがちな、「信頼」を補っていると考えられる。19世紀前半の地域化された経済の中では、生産者と消費者の距離が近く、消費者は誰が作ったものか、それが信頼できる相手であるかを認識しながら消費した。生産者も自分の生産物がどこで消費されているかを理解しながら供給していた。その時代には直接的に生産者と消費者の信頼関係が成立しえた。そのような時には規格もブランドもいらぬ。全く知らない人々が遠隔の地で生産したものを消費するようになった時に、頼りになる信頼の源として、パッケージに綺麗に印刷され、テレビでコマースシャルをしているブランドが意味をもつようになったのである。

## 顕名経済

このような情報を介してさまざまなサービスが「つながる」経済には従来の経済システムと大きく異なる側面がいくつかあるが、一番大きいのは「顕名経済化」であると考えている。

顕名化の意味を考えるためには、まず、近代における匿名経済化について理解しておく必要がある。19世紀後半以来、20世紀を通じて発達してきた大衆消費社会は、基本的に匿名取引を前提としてきた。スーパーマーケットに入っで計算してもらい、名乗ることなく現金を払って去ることが可能なシステムである。商品を作った生産者も誰が最終的に買ってくれたのかを知らない。情報技術が未熟な時代に大量に生産した商品を大きな商圏で（つまり遠くに運んで）販売するためには、匿名取引を前提としなければ処理できなかったからである。書籍がその象徴だ。電子書籍として買った場合には、誰が何ページまで読み進んだかまで

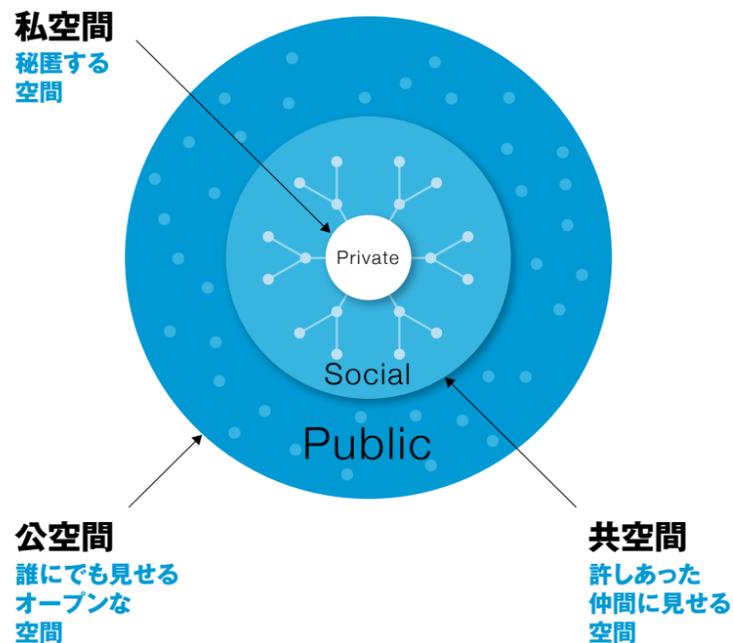
## 所有権 移転モデルから 利用権 ライセンスモデルへ

匿名性に合わせて発達したのが、商品の所有権を、貨幣を対価として移転する方式である。これを商品経済化と言ってもいいのだろう。匿名経済においては、誰に売ったか、誰から買ったか、必ずしも明らかでなく、後から追いかけることも難しいことが前提となる。そうすると、個々の取引を毎回完結させてしまわなければならない。さらに言えば、あとくされのないように、その商品の処分にもつわる全権を譲渡して、煮て食おうが焼いて食おうが新しい所有者の勝手、ということにしなければ、買う側は安心して匿名の相手にお金を払うことができない。

ところが、「つながり」「顕名」となる経済においては、匿名経済の制約がなくなると、従来の所有権移転型以外のビジネスモデルが可能となってくる。代表的なのが「利用権のライセンス」型のビジネスモデルである。

たとえば、最近、コインパーキング（時間貸し駐車場）などで車が借りられるようになってきていることに、皆さんお気づきだろうか？ 従来はレンタカーと言えば、駅そばのレンタカー会社の営業所に行くなどしなければいけなかった。それが今は、無人のコインパーキングに止まっている車を使いたいだけ使って、元のところに戻すようなことができるようになってきている。最寄りに借りられる車がどこにあるかを地図の上で検索することも可能だ。このようなことが可能となってきたのは、今やコインパーキングも、車も、借りるユーザーも、全てネットワーク化されているからだ。全てが認識され、ネットワーク上で追跡されている中では、車を持ち逃げすることも、払わないで逃げることも大変困難だ。実はどのユーザーが荒い運転をするか、などといったことも記録に残されている。そんな、

## 公・共・私空間モデル

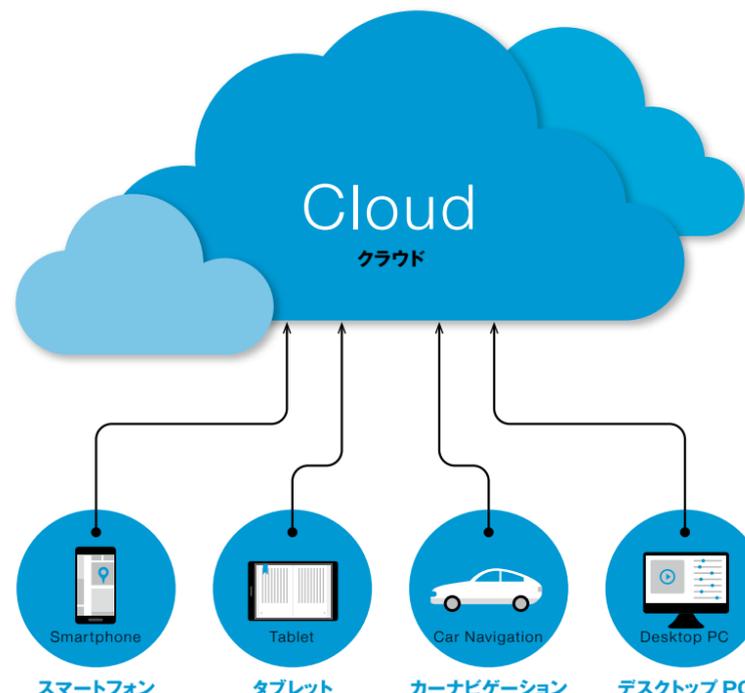


いものではなく、たとえば鉄道の改札内、企業が運営する遊園地のうち、もっと古くには鳥居に区切られた神社の境内、などは全て共空間だったと言っている。自らの意思によって立ち入った人は、行動を把握されて管理されることへの許諾を与えていると考えていい。法律的には約

これを整理して考えると、つながる時代には、誰にでも見せる「公(Public)」空間と、秘匿する「私(Private)」に加えて、許しあった仲間に見せる「共(Social)」空間の重要性が高まっていると考えることができる(Chart 2)。共空間は必ずしも新しいものではなく、たとえば鉄道の改札内、企業が運営する遊園地のうち、もっと古くには鳥居に区切られた神社の境内、などは全て共空間だったと言っている。自らの意思によって立ち入った人は、行動を把握されて管理されることへの許諾を与えていると考える。法律的には約

チャターゼでもある。せっかく何でもつながるようにしたいインターネットの上で、意図的に友達としかつながらない仕組みや、検索エンジンで検索しても見つからない情報の空間を構築しているからである。そんな感慨をよそに、ソーシャルネットワークは多くの人の共感を呼んで、ブログなどの誰でも見られる環境には載せられないプライベートな書き込みを促し、結果として情報共有を促進している。「許しあった仲間に見せる」空間の半閉鎖性が、利用者に情報提供をする安心感を与えて、オープンなネットワーク以上に情報の共有を促しているからだ。

## つながり経済を支えるクラウドコンピューティング



つながりと顕名性の中では、必ずしも車を所有してもらわなくても、利用権をライセンスする形で車の生産コストを回収するようなビジネスモデルが可能となり、それがコインパーキングなどの不動産活用とうまくマッチしたビジネスモデルが成立するようになってきているということだ。

### シェアリングモデル

「所有権移転モデルから利用権ライセンスモデルへの遷移」は、「専有モデルから共有(シェアリング)モデルへの遷移」というとらえ方をすることもできる。必要に応じて必要なものの利用権をライセンスすることができるのであれば、何も専有する必要はない、という発想だ。昔から存在する考え方ではあるが、前記のコインパーキングのレンタカーの例に見られるように、昨今のつながり技術の進展によって適用範囲が広がってきている。

電力やガスなどのインフラストラクチャは元々シェアリングすることが前提となっている仕組みだが、その世界にもさらなる進化の波が打ち寄せてきている。電力業界におけるデマンドレスポンスなどの考え方はその一例だろう。これまでは、単純な期間利用量しか把握できず、大ざっぱな料金設定しかできなかった

ったところに、ネットワークでつながれたスマートなメーカーが設置され、グリッド全体の利用量情報が利用者にフィードバックされるようになる。これによってピーク時増課金やオフピーク割引などをきめ細かく行ってデマンドサイドのコントロールができるようになってくる。

シェアリングの概念を少し広くとらえて、ある製品の製品寿命期間中に利用する人の数が増える現象をとらえると、昨今のリサイクルビジネスの隆盛もシェアリングエコノミーの拡大の一現象としてとらえることが可能だろう。書籍といった伝統的なものから、電気製品や衣類に至るまで、今や買い取りビジネスが花盛りである。このようなリサイクルビジネスの隆盛の背後にも情報技術の発達によって、需要と供給のマッチングがしやすくなったことがある。

### プライバシーと共(Social)な空間の関係

つながりの経済の大きな問題の一つにプライバシー問題がある。この文章もここまで読まれた方は、全てがネットワーク化され、プラットフォーム上にどんな情報も蓄積していくことに、気持ち悪さを感じているのではないだろうか？ 感じて当然である。単なる気持ち悪さを超えて、たとえばスマートメーターで監視し、ある日ある家の電力使用量がバッテリー落ちたというデータは、恐らくその家がしばらく留守であることを意味しており、そのような情報が、泥棒の手に入ってしまったような事態は是非避けたいところである。つながりと可視性は、よいことばかりではない。

つながりの時代のプライバシー問題の解決を考える上で、一つのヒントになるのが、フェイスブックなどのソーシャルネットワークである。実は、筆者のように何でもつながるインターネットのようなオープンネットワークを追求してきた者にとって、ソーシャルネットワークは一つのアン

款などの「契約」行為によって、共空間を利用し、その範囲でのプライバシー情報を提供していると考えることができ。今日のネットワーク空間上の共空間の問題があるとする、知らないうちに約款などに合意していると思われ、知らないうちに情報が利用されてしまっていることが多いこと、改善の余地がある部分だと思われる。

### 信頼の重要性——教えてもらえる特権

つながる時代において、集まる情報をどのように活用することが許されるか、許される場合にはどんな手続きを踏む必要があるのか、などといったことについて現在議論が進んでいる。そのような法的な許容範囲の議論以前に、つながる時代において、利用者に信用されて「見せてもらえない」企業になるか、信用されずに「見せてもらえない」企業に転落するかは、地図を持って山歩きをするか、持たないで歩くかくらいに大きな差になると思われる。

最終的には消費者に信頼される企業になることが最も重要なだろうと思っている。ユーザーは企業が真に自分の利便性を高め、安全を守ってくれていると思えば、驚くほどあけすけに自分の情報を出してくる。現に携帯電話会社は通話をつなぐために常にわれわれの居場所を把握しているが、犯罪者でもない限り、ユーザーがそのことを脅威に感じることはほとんどない。プライバシーは守りながら、自分にとって便利な機能は提供してくれるという信頼が成立しているから実現しているし、決して安くはない金額を毎月払い続けているのも、その安心感に対して払っている部分が大きい。

利用者に信頼され、共空間の提供者として、つながる経済の土台を担う企業が求められているし、そんな企業が強くなる時代が来ていると思う。



Otsawa Masachi

おおさわ・まさち／社会学博士。1958年生まれ。著書に『ナショナルイズムの由来』（講談社、毎日出版文化賞）、『不可能性の時代』（岩波新書）、共著に『ふしぎなキリスト教』（講談社現代新書、新書大賞）、二千年紀の社会と思想（太田出版）など多数。

# ソーシャルメディアは、ほんとうにソーシャルか？

公共性の残余をめぐる考察

大澤 真幸

「ソーシャル」とは何か。ここで「ソーシャル」というのは、ソーシャルネットワークというときのソーシャルである。この意味での「ソーシャル」は、ほんとうの（ソーシャル）かこれが問いたい疑問である。ただし、このような問いが成り立つためには、〈ソーシャル〉ということ、私が何を意味しているのか、明示しておかなくてはならない。その点は、すぐ後で述べるが、その前に、いささか興味深い、世界観の対立を見ておきたい。

昨2013年、日本の思想界では、ほぼ年齢の等しいふたりの若手の、つまり30歳代の若い論客の著書が大きな話題になった。鈴木健の『なめらかな社会とその敵』（勁草書房）と千葉雅也の『動きすぎたはいいけない』（河出書房新社）である。ソーシャルメディアを主題にしているわけではない、これら哲学的・理論的な著作に、今ここで注目することにほもちろん理由がある。両者がともに、ウェブ、とりわけソーシャルメディアにおける体験から、インスピレーションを得ながら書いていることが、明らかだからだ。つまり、二つの著作は、インターネットを積極的に活用している若い世代の、「ソーシャル」な体験を、哲学的・思想的に昇華した表現であると解釈することができるといえる。注目すべきは、ふたりの結論が互いにまったく反対を向いていることである。

鈴木健の著作は、「なめらかな社会」を実現するためには、どのような制度を設計したらよいのか、その基本を大胆にを奨励していたのだが、千葉の方は逆に、こう言う。切断せよ、と。孤立し、引きこもっていた方がよい、と言っているわけではない。接続過剰はよくない、適度に切断せよ、ある程度の壁を設けよ、というのが千葉の結論である。タイトルの「動きすぎたはいいけない」は「つながりすぎたはいいけない」と同義である。ウェブやソーシャルメディアを自在に使いこなしてきたと思われる、同世代のふたりの学者は、正反対の結論に到達した。この事実が、われわれに考えるためのヒントを与えてくれる。この点には、あとで立ち戻る。

ソーシャルメディアでつながり、壁や境界が取り払われた「なめらかな社会」か。はたまた、適度な壁を設けた「つながりすぎない」社会か。どちらをめぐれば、自由な精神が棲む、真に〈ソーシャル〉な社会が実現するのだろうか。

トは、このテキストの中で、「理性の私的使用／公共的使用」という区別を導入している。ここで、カントは、「私的／公共的」という対照を、普通の語法とは反対に使っている。カントによれば、ある人が何らかの共同体の一員として思考することは、たとえば公務員が国益のことを思って行動することは、理性の私的使用に属する。それに対して、理性の公共的使用とは、すべての共同体を横断する普遍性に基づいて考えること、コスモポリタン（世界市民）として思考することである。

## 〈ソーシャル〉であるとき、人は最も自由

さて、冒頭の問いに戻ろう。「ソーシャル」はほんとうに〈ソーシャル〉か。私が、真の〈ソーシャル〉と見なしていることが何かは、カントが「啓蒙とは何か」という有名なテキストの中で論じていることに依拠して説明することができる。カント

提案している。その制度の中には、独特な貨幣のシステムや、斬新な民主主義の手法が含まれる。鈴木は著作の方が、千葉のそれよりも、インターネットやソーシャルメディアとの関係は強い。思い切って単純化して言ってしまうと、鈴木がめぐらしているのは、ウェブ上のネットワークを、現実の世界に転換させたような社会である。そのような社会を、彼は「なめらかな社会」と呼ぶ。なめらかな社会とは、壁のない社会、人々がなめらかなにどこまでもつながっている社会である。ウェブに国境や壁がないように、である。恣意的に壁が設定されると、われわれは、壁の向こう側の人をとりたてて憎んでいるわけでもないのに、その人たちとつながることができなくなる。なめらかな社会とは——もう少しだけいいねいに言い換えれば——それぞれの人の好き嫌い、愛憎の度合い、友情や敵意の配分を正確に反映したネットワークになっている社会のことである。

千葉雅也の著作は、これとはまったく違うタイプの本だ。それは、ジル・ドゥルーズという、20世紀後半に活躍したフランスの哲学者について解釈した、学術的な著書である。ドゥルーズの哲学のある特定の側面を、いささか誇張して解釈しているのだが、これを読めば、千葉が、哲学（史）の研究者として一流であることがよくわかる。われわれは、ここで、千葉によって解釈されたドゥルーズの哲学に立ち入る必要はない。ただ、その解釈から導かれる結論が興味深い。鈴木は、壁を設けずに（好きな人と）つながること

共同体の一員として、共同体のために考えることが、どうして理性の「私的」な使用になるのか。特定の共同体のことしか考えていないからである。理性を私的に使用する時、人は、自分が好きだったり、自分と利害をともにする仲間や集団のことしか考えていない。別の見方をすれば、このとき、人は共同体のしがらみの中に拘束されている。それに対して、公共的に考えるということは、「どの特定の共同体のメンバーでもない者」になることを含意しているのだ、ある意味で孤独である。しかし、そのとき、人は、普遍的な社会の一員でもある。だから、公共的とされるのだ。ここで私が真の〈ソーシャル〉というのは、カントの「公共的」と同じ意味である。公共的であるとき、つまり〈ソーシャル〉であるとき、人は最も自由である。共同体のしがらみ、共同体のルールや規範、共同体の「空気」に支配されずにすむからである。ここで問いたいことは、ソーシャルメディアの「ソーシャル」は、このような意味での〈ソーシャル〉なのか、ということである。あるいは、「ソーシャル」には少なくとも〈ソーシャル〉へと向かう契機を含んでいるのか、ということである。

## つながるのか、断ち切るのか

たとえば、鈴木健の「なめらかな社会」は〈ソーシャル〉なのではあるまいか。なめらかな社会は、共同体を隔てる境界線や壁のない社会である。それは、無限に切れ目なく拡がるネットワークだ。その中の個人は、それゆえ、特定の共同体のメンバーとしてではなく、無限のネットワークの結節点として、それゆえ普遍的な社会のコスモポリタンの一員としてふるまっていることになる。つまり、なめらかな社会の中の諸個人は、定義上、カント的な意味で公共的になるまい、考えている、と見なしてさしつかえないのではないか。

鈴木健の考えでは、なめらかな社会は現実にはまだ存在しないが、インターネットやソーシャルメディアが形成す



1986年にフランスから発表され、日本でも話題となった傑作に理想的〈ソーシャル〉のイメージを探す。

悪童日記

アゴタ・クリストフ

1986年にフランスから発表され、日本でも話題となった傑作に理想的〈ソーシャル〉のイメージを探す。だが、次のように考えたらどうだろうか。壁を設定した上で、その内側ではなく、外側の者と交流するとしたら。内側を優先させれば、私的な共同体に過ぎない。しかし、外側との関係を優先させれば、それこそ、まさに公共的であり、〈ソーシャル〉ではないか。

しかし、これは、あまりに抽象的な主張だと思われるだろう。そこで、ひとつのイメージを提供しておこう。ハン

共同体を隔てる境界線や壁がないなめらかな社会。



動きすぎてはいけない

ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学  
千葉 雅也

過剰な接続を切断し、一定の壁を設けたつながりすぎない社会。

なめらかな社会とその敵

PICSY・分人民主義・構成的社会契約論  
鈴木 健

関係性の中には、それに近いものがすでにおおむね実現している。ウェブやソーシャルメディアの世界は（ほぼ）なめらかな社会である。たとえば、ソーシャルメディアを使えば、人は、原則的には誰ともつながることができる。つまり、誰をフォローすることもできるし、誰にフォローされてもかまわない。いずれかの個人の発言は、ときには、フォローし、フォローされるといふ連なりを經由して、つまり他者たちに次々と引用され反復されながら、ほとんど無限のネットワークの中をどこまでも拡散していく。このように、ソーシャルメディアやウェブの世界は、インターナショナルでコスモポリタンのな社会を形成しているのだから、われわれは、これをほんものの〈ソーシャル〉と認定してもよいのではないか。

だが、ここで立ち止まって反省してみよう。ソーシャルメディアに参加すると、人は、次々と入ってくる夥しい量の情報が気になる。情報を追いかけたり、読んだりするのに忙殺されるのだ。また、自分の発言やつぶやきが読まれているのか、受け止められたのか、反復されたり引用されたりしているのか、「いいね！」と言われているのかどうか、要するに、総じて、何らかの意味で自分が承認されているのかどうか気がかりで、ほとんどがまんがきかなくなる。これは、カントが「公共的」という語で指し示していた状態とは、正反対ではないか。理性を公共的に使用する者は、普遍的な社会の一員でありながら、英雄的な孤独を保っている。その孤独が彼に精神の自由を与える。ソーシャルメディアにはまっている者の場合は逆である。彼または彼女は、多すぎるつながり、過剰なしがらみにがんじがらめにされ、自由の領域をどんどん狭めてしまう。

ソーシャルメディアが持つポテンシャルへの期待

さて、そうすると、ソーシャルメディアが形成する世界に、公共性を、つまり〈ソーシャル〉なものを期待するのは、そもそも見当違いだ、ということになるのだろうか。そうしたものは、ソーシャルメディアには原理的に実現不可能だ、ということになるのだろうか。私はそうは思わない。ソーシャルメディアがはらむポテンシャル（潜在的な可能性）の中には、〈ソーシャル〉のための残余があるのだ。どこにそんな残余の可能性があるというのか。

ガリー出身の作家、アゴタ・クリストフに『悪童日記』という小説がある。この小説の主人公は、不気味な幼い双子である。小説は、この双子の一人称（ぼくら）の語りになっている。双子は、冷酷で、普通に考えると、「こんな悪い子はいない」と言っただけほど反道徳的である。彼らは、嘘をつき、他人を脅迫し、殺人すら犯す。だが、私の考えでは、この残酷な双子が他者（たち）とよりもつ関係は、〈ソーシャル〉ということの純粋な実例になっている。

鈴木健と千葉雅也の両方の議論によって取り残された論理的な可能性に、である。両者にとって盲点になっている領域がある。一方に、切断する壁や境界線がない世界がある（鈴木健）。他方には、ところどころに、あるいはときどき切断が入る世界がある（千葉雅也）。この二つで、論理的な可能性は尽きているはずではないか。どこに余りがあるのだろうか。

双子の視点からとらえたとき、普段は親密にしている女中は、言わば、壁の内側の人である。それに対して、ユダヤ人は、壁の外側の他者だ。双子は、壁の内側の仲間よりも、外側の他者との関係を優先させている。双子は、ユダヤ人に親しみを感じたわけではない。親密な感情は、むしろ女中に対して抱いている。親密な他者をも平気で罰する残酷さ、いかなるセンチメンタルな思いとも無関係な、壁の向こうの他者への冷静な愛。私の考えでは、これが〈ソーシャル〉ということの実例である。ソーシャルメディアやウェブに、こうした関係性を実現する力はあるだろうか。ある、と私は確信している。

# 社会的排除／包摂と「社会的なもの」

福祉の文脈からソーシャルを考える

福原 宏幸



Fukuhara Hiroyuki

ふくはら・ひろゆき／1954年生まれ。大阪市立大学大学院経済学研究所教授。研究テーマは労働や貧困問題。編者に「社会的排除／包摂と社会政策」(法律文化社)、共著に「21世紀のヨーロッパ福祉レジーム——アクティベーション改革の多様性と日本」(礼の森書房)などがある。

1990年代後半以降、日本では、経済的格差の拡大や生活保護受給者の増加などの問題が深刻化するとともに、新たな社会問題が登場してきた。それらは、長期失業、不安定雇用、ホームレス、ひきこもり、母子世帯の生活苦、子どもの貧困、高齢単身世帯の社会的孤立、精神疾患、自殺問題などであった。このような状況を背景に、2000年に入ってから以降、「社会的排除」そして対となる「社会的包摂」という用語が、社会問題にかかわる研究者や活動家によって頻繁に使われるようになった。もちろん、これは、「社会とのつながりの希薄さ」や「社会保障などの公的支援制度から漏れ落ちていること」など、現代の社会問題の全体的な特徴が、この用語によって理解できるようになったからであり、ここに新しい社会問題を発見したからであった。社会的排除／包摂の概念や定義については、すでにいくつかの研究によって、明らかにされてきた(\*1)。しかし、この社会的排除に立ち向かう包摂政策については、まだまだ検討すべき課題がある。一つは、どのような政策理念のもとに、この問題に取り組むのかという点である。これは、「社会的なもの」(英語ではザ・ソーシャルthe social、フランス語ではル・ソシアルle social)にかかわるものである(\*2)。もう一つの課題は、これと関連して、排除されている人々を社会の主流に向けてどのような手法によって包摂していくのかという点である。

以下では、社会的排除という用語が最初に使われたフ

ランスに注目し、これらの課題について検討していこう。また、それを踏まえて、日本における社会的排除／包摂の在り方についても触れていきたい。

## 「社会的なもの(the social)」って何?..?

「社会的なもの」とは何を意味するのだろうか。ひとまず、それは、近代以降の歴史過程において生じてきた社会問題の総体であり、これをどう理解するかといった政治的(および政策的)な理念や認識、その具体化としての国家による政策の体系、と定義できる。

フランスにおいて、この「社会的なもの(the social)」が、社会的排除との関連でどのように論じられてきたのか、ジヤック・ドンズロとピエール・ロザンヴァロンの言説(\*3)に依拠しながらみていこう。

まず、近代のle socialである。19世紀のフランスでは、一方で近代市民社会以前の伝統社会の共同体を良しとする共同体主義は、それぞれの個人が置かれている境遇・社会的身分の類似性、同じ土地への帰属、そして伝統的な権威(領主や教会など)への服従によって、社会的つながりを確保することを主張した。しかし、産業革命の影響によりこれは解体し、市民社会では、これに代わるものとして、人々を経済的なかたちで結びつける市場や、法的主体としての一人ひとりの市民が国家から保障されるものとする社

会契約によって社会的なつながりは確立されるとされた。

とはいえ、産業革命によって新たに登場してきた労働者階級と、彼らが直面した貧困という社会問題は、市場では解決されず、また議会政治のもとでもあまり議論されず改善も進まなかった。その結果、この社会問題は、社会のままとまりの喪失と階級対立という政治的色彩を帯びるとともに、解決の糸口は見いだされなかった。

19世紀末フランスの第三共和政では、こうした事態を前にして、もう一つの社会的つながりに関する構想が求められた。

## 貧困や格差などの社会問題を、

「排除」するのではなく、  
包み入れていこうとする

「包摂」という概念が、1980年から  
90年代にかけて登場してきた。

政治的なものに対応する

「社会的なもの」に常に自覚的だった  
フランスという国で、

この概念がいち早く発展してきたのも  
偶然ではないだろう。

では、「社会的排除／包摂」の視座は  
福祉国家の実現にどう生かされて  
きたのか。ヒントを探りたい。

それは、連帯の概念をめぐって構築されることになり、これを軸にしたle socialが登場してきたのである。エミール・デュルケームは、職業上の社会的分業を通じて社会構成員を結びつける相互依存関係を軸にした連帯原理によって社会は支えられ、このような社会は契約に先行して存在していたと論じた。すなわち、職域などにある中間集団を通して、社会

は個人の相互依存関係で支えられ、個人は社会によって「自律」を保障されるとした。また、近代の社会問題は、社会的分業によって社会が個人に及ぼすリスク——労働災害、職業病、高齢や失業など——の発生と、社会の規範に馴染んでおらず社会に悪影響を及ぼすとみなされた人々——伝統的な遍歴生活を送る職人層や浮浪者——の存在にあるとした。これらの解決は、前者については保険制度の導入によって個人のリスクを分散させ、後者については社会事業により産業社会へ陶冶することによって達成され、連帯が

いっそう強化されていった。

このように、近代フランスの社会は、連帯原理によって支えられるとともに、フランス型の福祉国家の成立をみる。これが、19世紀末から1960年代まで発展してきた近代フランスのle socialである。

## ポスト福祉国家への歩み

1970年代後半になると、それまでのle socialを支えていた連帯の概念が衰退する。社会経済の急激な変化にもなつて長期失業者や不安定労働者などが増加し、仕事に就ける者と就けない者の間に分断が生じ、社会的分業が維持できなくなった。こうして、労働を前提とした保険の原則だけでは福祉国家の基盤を維持できなくなった。ドンズロやロザンヴァロンは、70年代後半以降の社会的排除は社会経済的秩序によって生み出され、この排除が存続しつづけることがこれまでのle socialを危機に陥らせたと論じた。

こうして1980年代後半になると、排除されている者たちへの新たな社会的支援策が登場してくる。その主なものが、一連の都市政策(\*4)や参入最低所得(RMI、1988年創設)(\*5)であった。それらの政策の特徴のひとつは、支援に必要な様々な社会関係や社会資源が息づいている地域、非営利団体そして社会的企業などの中に連帯の創出を求めた点にあった。もう一つは、社会への復帰支援は契約としてなされることになった点である。すなわち、RMIでは、所得収入が一定水準以下に低下すると誰でも給付を受けることができる普遍的最低所得が導入されるとともに、政府との契約によって社会復帰のための社会・職業参入支援を受けることができることになった。

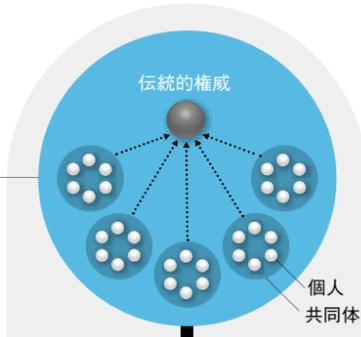
このように、新しい社会問題である社会的排除に対して、普遍的な権利保障としての最低所得保障と、社会・職業参入支援という社会的支援策が打ち出され、連帯原理の強化が打ち出された。また、このような体制を、ドンズロは支援推進型国家と呼んだが、これはポスト近代の



フランスでは、**連帯を軸に社会的なもの(社会問題への政治解決)が形づくられてきた。**

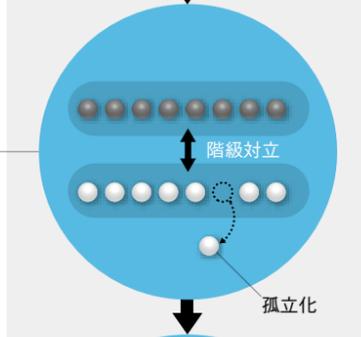
近代以前／共同体主義

身分が近く、同じ土地に属し、権威(領主や教会)に服従している境遇の近さが生む一体感



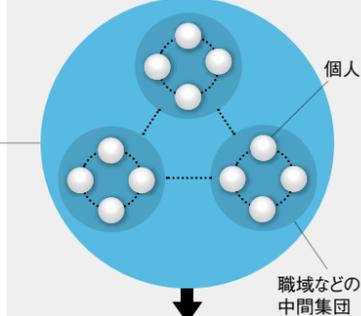
産業革命後／市民社会の誕生期

市民と国家が社会契約でつながる一方、対立構造も



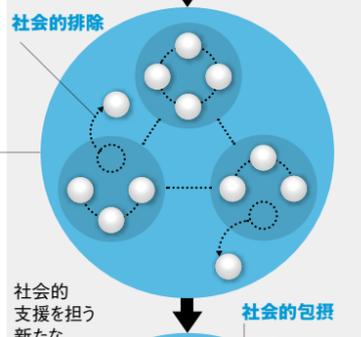
19世紀末／第三共和政(福祉国家)

社会的分業で生まれたリスクを、保険制度と社会事業でカバー



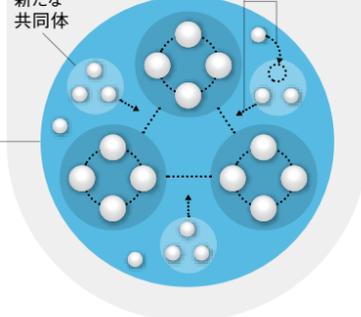
1970年代／福祉国家の危機

長期失業者や不安定労働者の増加



1980年代～／ポスト福祉国家

社会・職業参入支援やRMI(エレミ)・RSA(エルサ)の登場



**リアルな問題にいまこそ向き合う時**

日本では、フランスをはじめとする欧州諸国に比べて20年遅く社会的排除問題が生起してきた。この問題にどのように立ち向かうのか。いま、私たちは、そのことを問われている。

フランスでの取り組みは、この問題の解決は決して簡単なものではないことはもちろん、政治が「社会的なもの」に正面から向き合うことの重要性を教えてくれている。日本の政府のこの問題への対応は、排除された人々を、現金給付受給者とそれに至らない生活困窮者に分断し、異なる

た対応を行うことをめざそうとしている。現在の政府の社会的排除に対する政策理念が、自立・自助であるとすれば、自立に向けた意欲の喚起、自立の意欲を持った者だけを対象とした社会・就労支援だけにとどまるだろう。1990年代から2000年代前半の時期において、こうした社会的排除の問題が大きく膨らんだ要因のひとつは、まさに当時の政府のこうした政策にあったはずである。この点を、いま一度問う必要があるだろう。「社会的なもの」に正面から向き合う政治が問われている。また、それとあわせて、社会的排除問題に取り組む人々からのオルタナティブな政策提案が求められつつづけている。

こうした状況に比べ、日本の包摂政策はどのように展開されてきたのだろうか。2000年12月に、厚生省社会・援護局は『社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会』報告書を発表し、はじめて公的文書で社会的排除／包摂という用語を使い、①支援を担う新たな「公」の創造、②当事者の多様な問題の発見の重視、③金銭やサービスの供給だけでなく、相談体制の重視、情報提供、社会的つながりの確立、さらに④問題把握から解決までの連携と統合的アプローチなど、新しい支援の考え方や手法を提起した。また、この考え方は、2004年12月の『生活保護制度の在り方に関する専門委員会報告書』における日常生活支援・社会生活支援・就労自立支援として具体化され、その後「ホームレス等貧困・困窮者の『絆』再生事業」(2009年)やパーソナル・サポート・サ

ービス・モデル推進事業(2010年10月～2013年3月)を経て、生活困窮者自立促進支援モデル事業(2013年4月～2015年3月)へと引き継がれてきた。この流れは、2015年4月から実施予定の生活困窮者自立支援制度へと結実する予定である。

これらの制度における支援は、①支援の側が生活困窮者の発見に努めること、②相談事業実施による当事者の課題の発見、③支援において必要なサービスや資源を活用すること、④当事者の状態に配慮した就労支援として定式化され、その手法は、個別的、継続的、包括的(制度横断的)な支援によって社会・就労への参加を実現していくというものである。従来は、行政側の認定にもとづく現金給付(生活保護費給付)と画一的福祉サービスの提供にとどまっていた支援が、当事者のニーズや状態にあわせた個別のなサービス提供、本人の意欲や自尊心の回復なども視野に入れた支援へと変わりつつあることは、まさしく社会的包摂にふさわしい支援手法への変化といえよう。

しかし、これらの制度の対象は、政府の見解では、生活保護受給に陥る可能性のある生活困窮者に限定された。生活保護受給者に対しては、ハローワークなどを通じた就労支援の実施にとどめ、前記の支援枠組みとは異なったものとなっている。ここに、「広い意味での生活困窮者」に対する支援策のハードな路線とソフトな路線からなる二重構造を見いだすことができるだろう>(\*8)。

日本では、2008年の自民党麻生政権から2010年の民主党菅政権に至る流れの中で、社会的排除が取り上げられるとともに、社会保障改革では三つの理念、参加保障、普遍主義、安心にもとづく活力が掲げられた。しかし、2012年12月に登場した安倍政権は、再び小泉政権下で主張された「自立・自助」の提唱に戻ってしまった>(\*9)。

政権が変わるたびに変化する政策理念のもとでは、「社会的なもの」の議論が深められず、社会的排除問題への解決策は、容易に見いだすことはできないだろう。

**社会的包摂にふさわしい支援をめぐらして**

このように、ポスト福祉国家の時代のフランスでは、連帯原理を軸にして「社会的なもの」が再構築され、社会的包摂政策が構想されてきたのであった。これに対して、たとえば、ブレア労働権以降のイギリスは、社会統合主義にもとづく包摂政策を追求してきた。同じように福祉国家と呼ばれつつも、「社会的なもの」をめぐる理念や規範には、国ごとに違いがあるのである(\*7)。

社会・職業参入支援(2006年、岩波書店)、『社会思想史研究』34号『社会思想史学会編、2010年、藤原書店』、特集『社会的なもの』の概念(再考)、『社会的なもの』のために『市野川容孝、宇城輝人編、2013年、ナカニシヤ出版』がある。

(\*2) Donzelot, Jacques (1996) 'Les transformations de l'intervention sociale face à l'exclusion', in Serge Pauzan (ed) *L'exclusion: L'état des savoirs*. Decouverte/Rosnayvalon, Pierre (1995) *La nouvelle question sociale: Repenser l'Etat-providence*. Seuil. 連帯の新たな哲学—福祉国家再考—(エール、ロサンゼロナ著、北垣徹訳、2006年、勁草書房)

(\*3) 1997年に低廉家賃住宅(LM)の集合住宅群改善事業が開始され、80年代から90年代に「脆弱都市区域」(US)などの改善政策が展開されていた。『部落解放研究』193号『部落解放・人権研究所編、2011年、解放出版社』、『フランス都市社会政策と社会的不利地区』(川野英二)

(\*4) フランスの貧困と社会保護—参入最低所得(RMI)への途とその経験—(都留民子著、2000年、法律文化社)

(\*5) 『世界の貧困と社会保障—日本の福祉政策が学ぶべきもの』(大阪弁護士会編、2012年、明石書店)、『フランスの就労連帯所得とは何か—貧困な稼働層への最低所得保障と就労支援に向けて』(2009年改革、藤原宏幸)

(\*6) 『この社会統合主義については、以下を参照されたい』、『社会的排除／包摂と社会政策—(藤原宏幸編著、2007年、法律文化社第1章)

(\*7) 『21世紀のヨーロッパ福祉レジーム—アクティブ・シニア改革の多様性と日本』(藤原宏幸、中村健吾編、2012年、礼の森書房)、『日本におけるアクティブ・シニア政策の可能性—現状と展望』(藤原宏幸)

(\*8) 2013年1月21日開催の第3回社会保障制度改革国民会議に出席した安倍首相は、「自助・自立を第一に、公助と共助を組み合わせて、弱い立場の人にはしっかりと援助の手を差し伸べるという基本的な考え方を提示した社会保障制度改革国民会議」(サイト)。

# 「ソーシャル」を考えるための10冊



「社会」を対象にした学問の古典から、情報ネットワークに支えられた今日の「ソーシャル」な空間とそこで営まれる生活、さらに創作まで。今後も変容を続けるであろう「ソーシャル」について、今のうちに読んでおきたい書籍を選びました。



Number 1  
影響力の武器 [第二版]  
なぜ、人は動かされるのか



ロバート・B・チャルディーニ著  
社会行動研究会訳  
誠信書房／2007年  
人は、社会に属す以上、人から影響を受けずにはいられない。セールストークに乗って勧められるがままに物を買ったり、怪しげな団体の寄付に応じてしまったり……。消費者心理のからくりや、人間の不可思議な社会的行動についての丹念な調査・研究がまとめられた一冊。人といふ信頼関係を築くうえで参考となる。

Number 2  
空白を満たしなさい



平野啓一郎著  
講談社／2012年  
死んだ人間が蘇る「復生(ふくせい)」現象に揺るがされる世界。復生者である主人公は、自分が自殺した理由を追求しはじめる。果たして社会は復生者を受け入れることができるのか。人間はさまざまな人格を内包しているという「分人」概念を駆使し、社会のなかで人が幸福に生きるためには、という普遍的なテーマを突き詰めた傑作小説。

Number 3  
「社会的うつ病」の治し方  
人間関係をどう見直すか



斎藤 環著  
新潮選書／2011年  
近年増加している、怠けや甘えと誤解されがちな新型うつ病を、筆者は「社会的うつ病」と名付ける。なぜなら、その治療には、休養や薬物療法だけではなく、人間関係の積極的な活用や適度な活動、すなわち「社会参加」が重要だからだ。自己肯定できる人間関係＝「人業(ひとぐすり)」の重要性を説き、現在のうつ病治療に一石を投じた論考。

Number 4  
社会的排除  
参加の欠如不確かな帰属



岩田正美著  
有斐閣Insight／2008年  
ホームレスやワーキングプア、ネットカフェ難民、日雇い派遣、孤独死や自殺……。福祉の制度からこぼれ、苦しむ人々の姿は、まさに「人ごと」ではない。社会的排除が「今そこにある危機」として明確に立ち現れている日本で、目指されるべき社会的包摂のあり方を、社会参加と帰属にフォーカスしつつ探る。心に突き刺さる一冊。

Number 5  
ウェブ社会のゆくえ  
多分化した現実のなかで



鈴木謙介著  
NHKブックス／2013年  
場所性、人と人との間の距離、社会での個々人の役割——今、ますます多義的になっている「空間」をテーマに、ウェブ社会の来し方行く末を占う。リアル空間にウェブの情報空間が混入し、分断されて「孔(あな)」だらけになった現実をどう生きる。分断を束ね、共同性を復活させることは可能か。ここにもまた、震災後に考えるべき問いがある。

Number 6  
FABに何が可能か  
「つくりながら生きる」21世紀の野生の思考



田中浩也・門田和雄編著  
フィルムアート社／2013年  
近年、各種工作機械を揃えた市民工房「FabLab(ファブラボ)」の登場で、個人単位でのものづくりがブームとなり、インターネット経由で製作データ等を共有することで、国境さえも越える小さなものづくりのネットワークも構築されているという。「ものづくりとつながり」が社会を変え、大きな可能性を秘めていることに気づかされる。

Number 7  
ソーシャルデザイン  
社会をつくるグッドアイデア集



グリーンズ編  
朝日出版社／2012年  
社会のあたりまえの問題を「自分ごと」として解決に導く、社会貢献の新しい形・ソーシャルデザイン。ものやサービスの作り手、使い手、両者をつなぐ人や企業、三者にプラスがあるのがその魅力だ。地域おこしや農業の後継者探し、震災からの復興などの具体例から、新しい「つながり」を手にした人々の笑顔が伝わってくるようだ。

Number 8  
動員の革命  
ソーシャルメディアは何を変えたのか



津田大介著  
中公新書ラクレ／2012年  
ネット・ジャーナリズム界の寵児が、現在のソーシャルメディアの最新線を紹介。そもそもソーシャルメディアとは？という定義から、SNSが革命の発端となった「アラブの春」、ビジネスやまちおこしなどの場面のソーシャルメディアの活用のかた、震災時のソーシャルメディアの有用性など、具体的な例や提言が満載である。

Number 9  
人間の安全保障



アマルティア・セン著  
東郷えりか訳  
集英社新書／2006年  
1990年代半ばから「人間の安全保障」という概念が国際社会において議論されはじめた。これは、環境破壊、紛争、人権侵害、貧困などあらゆる種類の脅威から人間の生活・生存・尊厳を守り、持続可能な個人の自立と社会づくりを促すという、新しい安全保障の概念であり、地球規模で取り組むべき課題である。

Number 10  
社会学の根本概念



マックス・ヴェーバー著  
清水幾太郎訳  
岩波文庫／1972年  
ソシヤルの根本概念に立ち返るとき、そこにヴェーバーがある。一般化された用語で置き換える前の「社会学」が宿していた諸相を、徹底的に腑分け。宗教、経済、政治、法律などの各領域で社会学的研究を成し遂げたヴェーバーならではの網羅的な考察が、微に入り細を穿って論じられる様は、圧巻だ。

# CEL Insight

Vol. 106 March 2014

The Reports from Researchers

持続可能な社会に向けて  
CELが発信する情報は、  
「エネルギー・環境」「都市・コミュニティ」  
「住まい・生活」を  
3つの柱に展開されています。

## CEL Output

Part 1 / Report by Suzuki Takashi

Part 2 / Report by Kamo Midori

その1

### 機械と生命の パラダイム／前編

文／鈴木 隆

42

Page

42

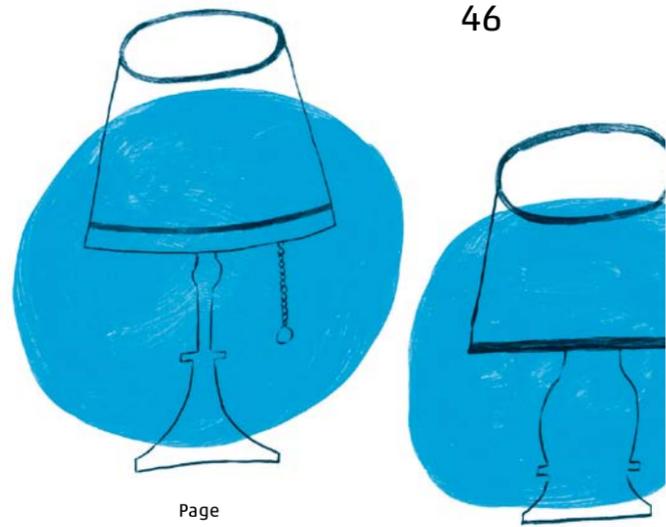
46

その2

### 人と 自然が つながる住まい

文／加茂みどり

46



		Page
人間力を育む次世代教育／第三回	住まいを活きた教材とする住教育の役割／確田智子	50
エネルギー講座 第九講	家庭や地域の創エネルギー 監修／下田吉之 文／当麻 潔	54
	第十講(最終回) 将来へ向けてのシナリオ 監修／下田吉之 文／当麻 潔	58
CELからのメッセージ	タテ・ヨコ・ナナメ／木全吉彦	64

Illustration by Akiyama Hana

# 衣食住遊

第三回

## 「和食」を支える地方野菜

文 向笠 千恵子



Illustration by Hatano Hikaru

和食の基本は一汁三菜であるとされる。ご飯と漬物を別にして、汁1品とおかず3品という意味だ。「菜」はおかず。おそう菜だが、野菜を指す言葉でもある。和食には野菜のおかずが多いし、野菜がともおいしいので、混用されるようになったのだとわたしは信じている。野菜は元をたどれば野草が改良されたものだが、何百年何千年間も栽培されるうちに、気候風土に合わせて性質が変わった。というより、農家の人たちがそのように改良してきたのである。わたしは、野菜は人間が創り出した文化遺産だと呼びたい。

野菜はごく身近でつくられるものだった。冷蔵庫がなく、流通手段に乏しい時代には、野菜は地元でつくり、地元で食べるのが当たり前だったのだ。現代の「地産地消」の動きは、じつは、温故知新の一例なのである。

そして、風土に根付いた野菜はその土地に合っているぶん、食べやすく、おいしい。これが地方野菜のいちばんの魅力で、持ち味を生かした調理法が工夫され、郷土料理として伝承されるようになった。

地方野菜で最初に知名度が全国区になったのは京野菜である。賀茂なす、九条ねぎなど地名が付いているから、産地名をつなぎ合わせると京の街をぐるりと取り囲むラインになる。浪速野菜、加賀野菜、庄内野菜なども、いちいちの野菜名を地図でたどってみるとおもしろい。

東京でも、いま、江戸東京野菜が勢いづいている。東京都には現在も野菜農家が健在で、江東区・葛飾区などでは小松菜、西郊の武蔵野台地では、うどが特産である。そのうえ、昔の野菜の復活運動も盛んで、絶滅しかけた地元野菜が40種類以上も息を吹き返している。

たとえば大根だ。江戸時代からよく知られているのは3種類。江東区亀戸特産の亀戸大根は、もともとは関西から持ち込まれた小ぶりの品種で、水気が多くやわらかいので、葉も一緒に浅漬けにされた。江戸庶民がこぞって愛好したおかずだ。世田谷区大蔵の大蔵大根はみごとな円筒形で、先端部がくると丸い。こちらは、水分が少なく繊維がしっかりしているので、風呂吹き大根などに向く。もうひとつ、練馬区練馬大根は大型種の人気もので、たくあんや煮物用など食べ方に合わせて数品種に分かれている。また、練馬大根は5代将軍綱吉が栽培を命じ、尾張の宮重大根を導入して創り出したともいわれる。

食べ方万能をうたう青首大根が主流の現代に比べ、地方野菜の時代の大根は個性豊かで、味わい方もいろいろだったのだ。

今も昔も、人生の楽しみはおいしいものを食べることだ。それだけに、知らない野菜には誰もが興味しんしんで、往時は江戸みやげには野菜の種子が大喜びされた。そんな種子から始まった野菜が各地にはたくさんあるはずだ。

無形文化遺産「和食 日本人の伝統的な食文化」の認定理由のひとつは、郷土料理の多彩ぶり。それを支えているのは地方野菜というわけだ。身近な野菜をあらためて見つめ直し、新たなおいしさを発見したいものである。

むかさちえこ／フードジャーナリスト、食文化研究者。東京・日本橋生まれ。慶應義塾大学文学部卒業。本物の味、伝統食品、郷土料理、生産者、歴史、器などを多面的にとらえながら、現代の食と食文化を綴る。農と食による地域活性化のサポーターもつとめる。「食の街道を行く」でタラン世界料理本大賞グランプリを受賞。著書に「すき焼き通」「日本の朝ごはん」「食べる俳句」など多数。

Mukasa Chieko

# 機械と生命のパラダイム

私たちの直面している混迷は、近代科学の考え方に  
 囚われすぎた結果ではないか。  
 2回にわたり、もの見方の根本にある  
 パラダイムについて、  
 これまでの歴史の変遷をたどり、  
 これからの解決の糸口を見出す。

## 混迷を解くカギ／前編

今日、さまざまな分野で見られる閉塞状況の背後には、たいてい2つの「パラダイム」の対立が潜んでいる。機械論と生命論である。私たちは、近代以降、もっぱら物事を機械のように考える見方しかなくなっているが、生命として捉える見方も必要である。この2つを使い分けられるようになることが、混迷を解くカギとなる。

本稿では、2回にわたって、機械論

と生命論という2つのパラダイムについて見ていくことにする。今回は、パラダイムのはたらき、機械論と生命論の歴史の変遷について述べる。

### パラダイムのはたらき

提唱者のトーマス・クーンによれば、パラダイムとは、「一般に認められた科学的業績で、一時期の間、専門家に対して問い方や答え方のモデルを与え

### 機械論とは

物事を機械に見立てる考え方に、機械を部品に分解するように、全体を部分に分けて分析すれば全体についても理解できるとする。

### 生命論とは

物事を生命に見立てる考え方に、器官を集めても生命が生じないように、全体は部分の単なる寄せ集めではなく独自の特性があるとする。

るもの」である(\*1)。より一般的には、もの見方、考え方の枠組み、世界観といえる。

パラダイムが定着しているときに、特定の科学者集団がパラダイムに準拠して行う一連の研究が「通常科学」である。ところが、パラダイムにそぐわない変則事例がいくつも現れ、予測がひんぱんに外れるようになると、パラダイムは危機に陥る。そして、ついには科学者集団が新しいパラダイムに乗りかえる「パラダイム・シフト」、すなわち「科学革命」が起こる。

そもそも、私たちは、何の囚われもなく純粹無垢の事実を見ることはできない。理論という色メガネを通してしか物事を見られないのである。観察とは理論を前提とした解釈にほかならない(理論負荷性)(\*2)。理論の大本にあるパラダイムが異なると、同じ対象を見ても、違った解釈がなされることとなる。例えば、明けゆく東の空を眺めても、地動説のケプラーは太陽が静止していると見、天動説のティコ・ブラーエは地球が静止していると見た。明治時代の脚気の原因究明では、陸軍と東大医学部は、当時最新の西洋医学に基づき脚気の病原菌を探したが見つけず、迷信と決めつけていた麦飯を摂取するという民間療法により、脚気の原因のビタミンB1不足を補っていたことが判明した(\*3)。

異なるパラダイムには、その優劣を比較する共通の尺度、評価基準は存在しない(共約不可能性)。そもそも新

Chart 1

### 同じ図形が違って見える例／その1

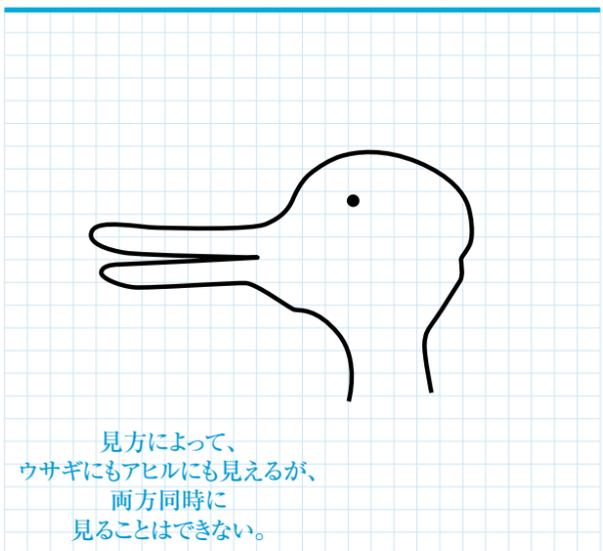
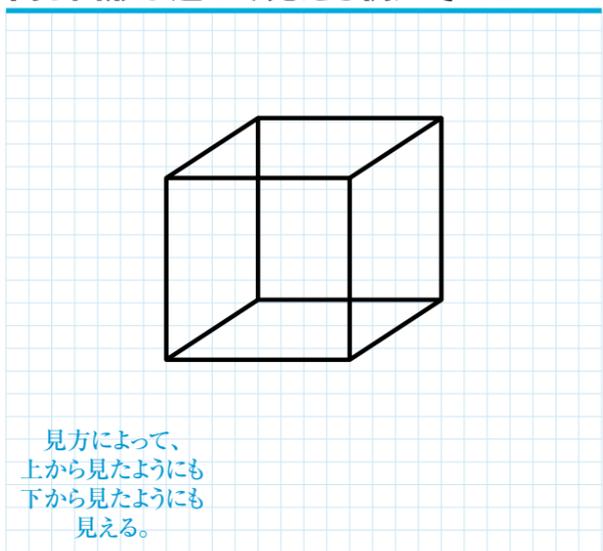


Chart 2

### 同じ図形が違って見える例／その2



の説得による同意の獲得なのである(\*4)。

心理学の実験で、「理論負荷性」と「共約不可能性」を疑似的に体感することができる。Chart 1(\*5)は、アヒルを知っている人にはアヒルに見えるし、ウサギを知っている人にはウサギ

に見える。両方知っている人にはどちらにも見えるが、2つが同時に見えることはなく、Chart 2（\*6）も、上から見たようにも下から見たようにも見えるが、同時に見ることはできない。

## 機械論と生命論の歴史の変遷

機械論は、自然や物事を機械のように見て理解する。一方、生命論は、生命のように見て理解する（\*7）。この2つのパラダイムには、Chart 3のように、二千五百年余にわたる歴史的な変遷がある（\*8）。

自然哲学が成立したのは、古代ギリシャの紀元前6世紀、万物の根源は水だとしたタレスから始まる。紀元前5世紀に入り、デモクリトスは自然を原子（アトム）として見る原子論的自然観を提唱、次いで、プラトンは自然を数学（幾何学）として見る数学的自然観を主張した。機械論の始まりである。

紀元前4世紀になると、アリストテレスが自然を生きものとして見る目的論的自然観を打ち出す。素材である「質料」（ヒューレー）、「本質である「形相」（エイドス）、最終的に行きつく終わりである「目的」（テロス）、目的に向けた始まりである「作用（もしくは始動）」（アルケー）の4つの原因によって、世界を完全に理解できるとしたのである。人の手を借りず自ら変化する自然や生命では、「靈魂」（プシケー）が本

質である形相だとされた。このように、タレス以来の知識・学問を大成し、「万学の祖」と呼ばれたアリストテレスが唱えたのが生命論である。アリストテレス以降、生命論が機械論に入れ替わって支配的となり、二千年の長きにわたって君臨する。

17世紀になると、機械時計や顕微鏡の発達により、自然をひとつの精巧な機械、絶対的な自然法則に従った時計仕掛けの世界として見るようになる。デカルトは、自然を単なる幾何学的な延長、均質な空間的広がりのみとした（\*9）。ここから近代科学が成立し、西欧の様相は一変する（\*10）。コペルニクス、ケプラーによって、宇宙は地球中心の天動説から太陽中心の地動説へと根底から覆る。ガリレオ、ニュートンによって、落下の法則、運動の三法則、万有引力の法則が発見される。天体と地上の世界が力学の法則によって統一的に説明され、物理学は科学の根本となる。科学は、アリストテレスが掲げた目的による擬人的な説明を主観的なものとして排除し、外から客観的に原因と結果を見出し、単純かつ普遍的な法則として力学的に説明するようになる。複雑な事象は単純な要素に分解し、観察された要素を数学によって仮説として結び付け、これを実験によって検証する。機械論が生命論と入れ替わって支配的となり、現代まで四百年続く。

しかし、20世紀後半以降、生命論がふたたび有力となりつつある（\*11）。

機械論の限界が目立ってきたからである。切り離された要素からこぼれ落ちる全体としての創発的な特性の重要性が認識されはじめた。例えば、分子生物学が遺伝情報（ゲノム）をすべて解読しても、生命を生み出すことはできない。市場では、誰も意図しないのに、バブルが膨らみ突如として弾ける。

また、客観的に原因と結果では説明できないこともわかってくる。ミクロの世界では、どんなに測定の精度をあげても、微細な物質粒子の位置と運動量を同時に正確に測定することができない（不確定性原理）。一方、マクロの世界でも、決定論に従っていないながら、原因と結果が複雑に絡み合い予測ができないカオス現象が明らかとなる。

さらに、数量では捉えられない多様な性質へも注目が集まっている。例えば、私たちが抱く感じ（クオリア、感覚質）を科学で扱えるのが議論されている。人間の知性として、知能指数（IQ）以外に、心の知能（EI）や多重知能（MI）といった、数量的には捉えられない性質の概念化が提唱されている。

かくして、機械論に基づく科学を極めた研究者にも、生命論へ歩み寄る人が増えている。例えば、生命や精神の

## 20世紀後半以降、生命論が有力となりつつある。機械論の限界が目立ってきたからである。

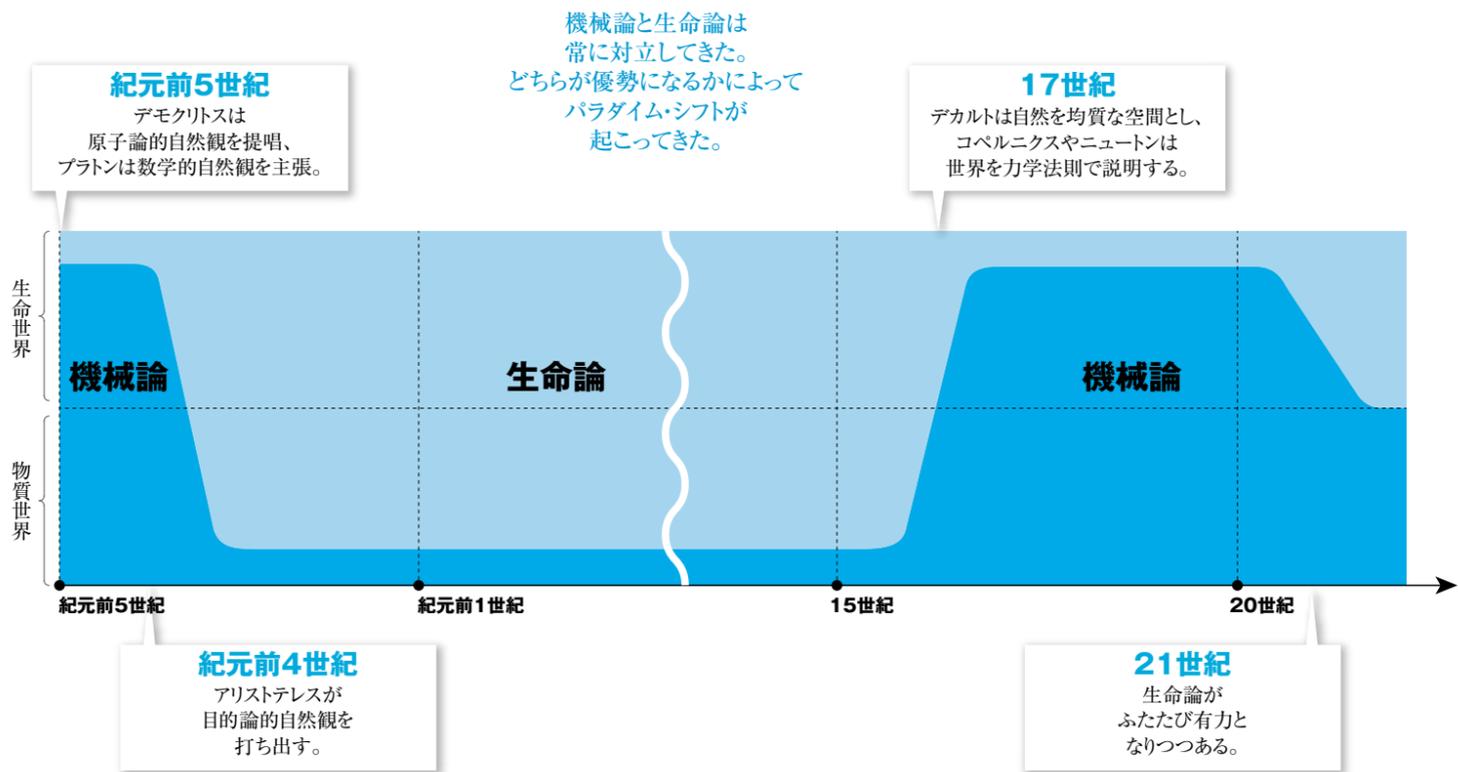
問題を文明の中核に据えることが必要だとし（\*12）、生命論を学ぶことが重要でありさまざまな問題に適用できるとし（\*13）、物理学よりも生物学から比喩を得るよう薦め（\*14）、現在は生命パラダイムの時代と位置づけることに賛成し（\*15）、生きものそのものを見ようとする感覚を取り戻すべきだとする（\*16）。

情報通信や交通の発達によって、人々の相互作用は時空を超越して加速度的に増加・拡大し、複雑に絡み合い続けていく。かつてグレゴリー・ベイトソンは複雑な相互作用には精神的特性が現れると指摘したが（\*17）、複雑化する社会はますます生命的様相を帯びてきている。

以上のように、支配的なパラダイムは、紀元前5世紀・機械論→紀元前4世紀・生命論→17世紀・機械論→21世紀・生命論へと交互に入れ替わりながら変遷してきている。ただし、同じ機械論、生命論といっても、後に復活するときには、基本的な立場は継承しつつも、その時代の状況に応じて変化し、いわばそれん状に内容が深化・発展している。

今回は、現代における機械論と生命論の特徴、使い分けについて述べる。

Chart 3  
機械論と生命論の歴史の変遷



（\*1）『科学革命の構造』（トーマス・クーン著、中山茂訳、1971年）〔原著1962年〕、みすず書房

（\*2）『科学的発見のパターン』（フーワード・R・ハンソン著、村上陽一郎訳、1986年）〔原著1958年〕、講談社学術文庫、『知覚と発見』（フーワード・R・ハンソン著、野家啓、渡辺博訳、1982年）〔原著1969年〕、紀伊國屋書店

（\*3）『模倣の時代』（板倉聖宣著、1988年、飯説社）は、「論より証拠」ならぬ「証拠より論」と評している。

（\*4）『パラダイムとは何か』（野家啓著、2008年、講談社学術文庫）

（\*5）ジョセフ・ジャストロが1900年に考案した図形。

（\*6）アルバート・ネッカーが1832年に考案した図形。

（\*7）生命論は、古くからある生氣論と同じ系統の立場である。しかし、生氣論は、主に生物学の分野で生命観らいて主張された。本稿では、より広く世界観をカバーした中立的な名称にした。ことから、生命論とした。

（\*8）『思想史のなかの科学』（伊東俊太郎、広重徹、村上陽一郎著、2002年、平凡社ライブラリー）『科学思想史』（坂本賢三著、1984年、岩波書店）『物理科学史』（村上陽一郎著、1985年、放送大学教育振興会）『科学の発想をたずねて』（橋本毅彦著、2010年、左右社）『思想史 第二版』（中村雄一郎、松敬三、田島節夫、古田光孝、1977年、東京大学出版会）『西洋古代・中世哲学史』（クラウス・リーゼンフーバー著、矢玉俊彦訳、2000年、平凡社ライブラリー）『科学は「自然」をどう語ってきたか』（菅野礼司著、1999年、ミネルヴァ書房）『生命科学の近現代史』（廣野喜幸、市野川容孝、林真理編、2002年、勁草書房）『物語 哲学の歴史』（伊藤邦武著、2012年、中公新書）『哲学史における生命概念』（佐藤康邦著、2010年、放送大学教育振興会）にもあるように、常に批判や反批判が行われていた。

（\*9）『数学の、x軸とy軸の「デカルト座標」はその名残である。』

（\*10）『近代科学の誕生』（ハーバート・バタフィールド著、渡辺正雄訳、1978年）〔原著1957年〕、講談社学術文庫

（\*11）『政治理論のパラダイム転換』（藤原保信著、1985年、岩波書店）『生命論パラダイムの時代』（日本総合研究所編、1993年、ダイヤモンド社、田坂広志の論文）『科学思想の系譜学』（大林信治、森田敏照編著、1994年、ミネルヴァ書房）『生命思考』（石川光男著、1986年、阪急コミュニケーションズ）『生命と宇宙』（小林道憲著、1996年、ミネルヴァ書房）

（\*12）『物質文明から生命文明へ』（渡辺格著、1990年、同文書院）

（\*13）『生命論パラダイムの時代』（日本総合研究所編、1993年、ダイヤモンド社、イリヤ・プリジンの基調講演）

（\*14）『システムの科学』（ハーバート・A・サイモン著、1999年）〔原著1996年〕、パロナルメディア

（\*15）『生命』（中村雄一郎、池田清彦著、1998年、岩波書店）

（\*16）『科学者が人間であること』（中村桂子著、2013年、岩波新書）

（\*17）『精神の生態学』（グレゴリー・ベイトソン著、佐藤良明訳、2000年）〔原著1972年〕、新思案社、『精神と自然』（グレゴリー・ベイトソン著、佐藤良明訳、2001年）〔原著1979年〕、新思案社

# 人と自然がつながる住まい

集合住宅の新しいあり方をこれまでさまざまに提案してきた、大阪ガスの実験集合住宅「NEXT21」。東日本大震災を受けて、住居と自然、そして人と人がつながる新たな集合住宅づくりのため、第4フェーズの実験が始まった。今なお進化を続けるその取り組みとは。

## 大阪ガス 実験集合住宅 NEXT21 第4フェーズ居住実験



NEXT21外観

### はじめに

1993年に竣工した大阪ガス実験集合住宅NEXT21（右下写真）は、近未来の都市型集合住宅のあり方を、設備やエネルギーのみならず、住まいや生活といった視点からも考察・検証しようとする試みである。

地下1階、地上6階建ての住棟は、百年の長寿命を目指し、いわゆるステルトン・インフィル方式により建設された。住戸や設備の変更・更新性を確保し、18住戸は、それぞれ異なるライ

フスタイルに対応した平面計画となっている。建設当初より燃料電池・太陽電池・蓄電池を含むエネルギーシステムを採用し、大規模な建物緑化も実施している。改修を重ねつつ、社員およびその家族による実際の居住のもとに、

NEXT21  
第4フェーズコンセプト図

その時々々の住まいを取り巻く課題をテーマとして第1〜3フェーズ居住実験を行い、昨秋、竣工後20年を迎えた。本稿では、2012年から2013年にかけて改修を行い、同年6月より開始された第4フェーズ居住実験について概要を紹介したい。

### 第4フェーズ 居住実験の テーマ

第4フェーズの居住実験のテーマは「環境にやさしい心豊かな暮らし——

人・自然・エネルギーとの関係が深化する都市型集合住宅——」である。議論の出発点は2011年3月11日の東日本大震災であった。大自然災害の前

に、人の造った都市は一瞬で自然に飲み込まれた。自然と人工的な構造物・都市という対比は、そもそも空しい。また、人と人とのきずなや関係性、エネルギーの使い方や人とエネルギーの関係性など、震災によって顕在化、または再認識された課題は多かった。そこで第4フェーズでは、人と緑・自然の関係性を改めて問い直した。テーマに付随するコンセプトを「人と自然の関係性の再構築」「人と人のつながりの創出」「省エネ・スマートな暮らしの実現」とし、計画検討を進めた。

### 人と自然の 関係性の再構築

#### 緑地の再構築

私たちは人工的な建築物・住宅に自然を取り込もうとしてきたが、自然の中にある住宅、自然とともにある生活を目指すべきではないだろうか。住宅を創り、そこに自然を取り込むというのではなく、まず自然があり、その中に住宅を創る。今回はこのようなスタンスで全体計画を行った。そのために、住戸計画の前提となる住環境の地盤としての自然を、住棟にまず実現することとした。

広域都市緑化ネットワークの一端を

担う緑地が住棟に連なるというコンセプトは、NEXT21の建設当初からのものである。しかし、竣工後20年が経ち、なかには、弱ったり、枯れかかっている樹木や、土が雨に流され続け、草木を支えるという役割を果たしていない場所もあった。そこでいま一度、住棟の緑地を再構築することとした。1階から屋上まで連なる「緑の回廊」を再編し、屋上を頂上、3階から6階までを中腹、1階を麓とみなし、人の営みと自然が重なる丘陵地を、立体的に住棟内に再現した。

#### 中間領域の提案

緑地を整備すると同時に、自然の中にあり、外部の豊かな自然環境を取り

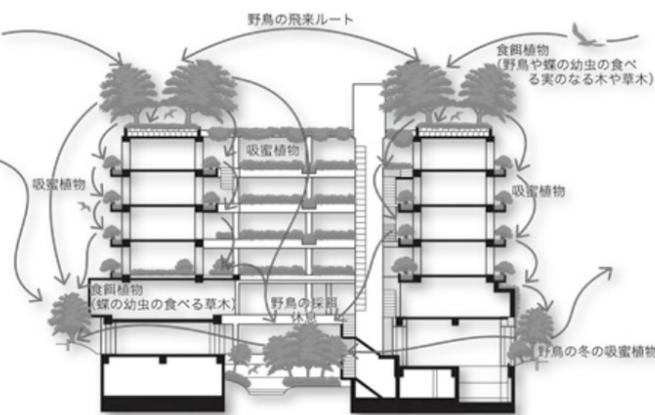
### 人の営みと 自然が重なる丘陵地を、 立体的に住棟内に再現。

### 緑の回廊



↑ 中庭風景

屋上から中間階、1階まで連なる緑が野鳥を引きこむ。



↑ 断面図

広域都市緑化ネットワークに位置づけた「緑の回廊」に住棟内に構築。

入れた生活を可能とする住宅計画を指した。具体的には外部空間と室内空間の重なり合う空間に、その中間領域を設けた。

日本は基本的には温暖な気候であり、伝統的な住宅は夏の過ごしやすさを確保する工夫がなされている。障子や襖、格子戸などで室内空間と外部空間を緩やかに仕切り、外部と内部の関係性が確保されている。外部と内部の「中間領域」となる縁側や土間では、室内にいながら外部空間を感じ、季節感を楽しみ、外部の快適性を享受する居住文化があった。そのような空間を集合住宅の中に実現することを試みた。

具体的には、今回改修を行った305号室「余白に棲む家」(設計・竹原義二・無有建築工房)と、403号室「しなやかな家」(設計・近角櫻子・近角建築設計事務所)において、住棟の緑地空間と親和性の高い住戸内空間を設計者に問い、実現した。

「余白に棲む家」は、住戸から個室を切り取った「余白」をすべて中間領域とする入れ子構造を持ち、住棟緑地から住戸ベランダ、室内へと質の違う緑が連続して引き込まれている。「しなやかな家」では、ダイニング・キッチンから露台を通じて住戸が住棟緑地とつながり、昔ながらの縁側空間が中間領域として集合住宅の中に実現している。これらの中間領域は、外部空間を受け止め、住戸内との親和性を高めると同時に、外部空間と住戸内空間のバツファーとしての機能も果たしている。

## 人と人のつながりの創出

前述の「中間領域」は、人と人のつながりを創出する場としても想定されている。

「余白に棲む家」では、中間領域を「子どもの居場所・集まる場所」として設計した。子どもたちを集め、放課後クラブや学童保育などの活動をしている、子どもを持つ夫婦が居住者像である。外部空間から自然につながる住戸空間に子どもたちが集まり、交流し、共に時間を過ごすという想定である。「外土間」や「内土間」と連なる「余白」は、都市に広がる回遊性を住戸内に引きこんでいる。

「しなやかな家」では、中間領域を「料理教室の行われる場所」として設計した。リタイアした夫婦が居住者像であるが、妻は元料理教室の講師であり、退職後、自宅で教室を開くという想定である。教室となるダイニング・キッチンは、露台を通じて外とつながり、小さな路地に導かれ、訪れる人も温かく受け入れることができる。

同時に、「子どもたちに居場所を提供する住まい」「リタイア後に料理教室を通じて人と交流できる住まい」は、少子高齢時代のライフスタイルに対応した住戸の提案となっている。NEX T21では、今までもいくつかの少子高齢時代に対応した住まいを提案しているが、今回は特に「しなやかな家」に

において、想定とは異なる少子高齢時代の多様な住まい方にも、壁の位置を変え住戸を分割するなど、しなやかに対応することが可能となっている。

共用部においては、NEX T21の住棟と地域空間の重なり合う空間に「中間領域」として、交流室を設けた。交流室は1階に位置し、中庭であるエコロジカルガーデンとガラス越しに隣り合い、開放的な空間となっている。居住者による地域の人を招いての利用が可能であり、周辺住民とのコミュニケーションが促進されることが期待される。また、地域で活動するさまざまな人々や地域資源間の新たな関係づくりにつながる取り組み(U-CoRo——上町台地コミュニケーションルーム——プロジェクト)の舞台ともなる予定である。

また、第4フェーズ居住実験では、省エネ・スマートな暮らしの実現のためにも先進的なエネルギーシステムをはじめさまざまな工夫がなされている。これについての詳細は別の機会に譲りたい。

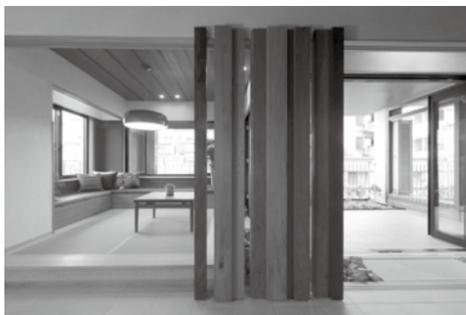
## おわりに

以上が大阪ガス実験集合住宅NEX T21第4フェーズの、住まいと自然関連居住実験の概要である。今後も居住者の協力のもとで、多くの居住実験を行う予定である。広くご意見・ご批判をいただき、よりよい実験を展開していきたい。

## 「余白に棲む家」305号室



1 外部空間と連続性を持つ内土間1



2 子どもの居場所となる間室と外土間1

### 改修事例1

子どもが集まり、それぞれの居場所を見出す住まい



住戸から個室を切り取った「余白」をすべて中間領域とし、都市に広がる回遊性を住戸に引きこむ。

1/180

## 「しなやかな家」403号室



1/200

露台を通じて緑地と住戸がつながり、昔ながらの縁側空間が再現される。

### 改修事例2

料理教室を通じ、人と人が出会う住まい

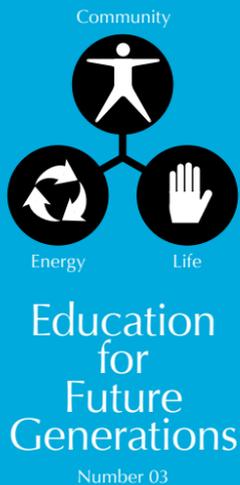


1 家族のための居間



2 教室となる台所・食事室

住まいは、人権、衣食住の文化、健康、エネルギー・環境、情報、防災・減災、子育てなど、さまざまなものが横断的に関わり凝縮された場であり、次世代教育のための非常に豊かな教材といえる。今回は、住教育が社会の中でどういう役割を果たしているのか、また、住まいに関するリテラシーをどのように高めていったらよいのか、今後の課題も見据えて考えてみたい。



# 住まいを 活きた 教材とする 住教育の役割

## 碓田智子

Usuda Tomoko  
うすだ ともこ / 大阪教育大学教授。1993年大阪市立大学大学院生活科学研究科後期博士課程修了。専門は居住環境学・住生活学。伝統的住文化を継承する住まいづくり・まちづくり、地域性に対応した住まい・まちづくり教育、歴史系博物館における住教育教材などをテーマに研究活動を行っている。



## 日本における 住研究と 教育への導入

今日、進む少子高齢化、一人暮らし世帯の増加、防災・減災への取り組み強化の必要性など、私たちの暮らしが抱える課題は非常に多い。生活や社会環境が大きく変化する中で、暮らしの場である「住まい」の設計・維持管理、そこで行われる住文化の創造と継承、住まいが集まってできるコミュニティの関係づくり（まちづくり）は、今後さらに重要視されるべき分野である。また、自ら住まいと環境に働きかけ、それを改善していこうという主体を育てるための次世代教育も、今まで以上に必要となってくるだろう。

現在の家庭科における住教育分野は、非常に的を射た学習項目の設定とそれに応じた教科書の充実ぶりを見せる。

## 学校教育における 住教育の現状

ようやく1980年代になってからのことである。このように、住宅政策そのもののレベルアップに時間がかかったこと、また庶民の住居に関する研究、すなわち住居学も戦後発達した比較的新しい分野でもあることから、住まいに関する教育の普及は新しいことといえよう。

学校教育の普及にあたっては、学校教育

住まいに関する教育について考える背景として、日本の第二次世界大戦後の住宅政策を簡単に振り返ってみよう。戦後すぐの1950年代は、圧倒的な住宅数の不足と、公衆衛生面等最低限の居住水準の引き上げが目先の課題であった。60年代の高度経済成長期から民間住宅の供給数が公共住宅を超えるようになり、70年代になると住宅数が世帯数を上回るようになる。住宅の質の向上、さらにはまちづくりへと政策の目標や人々の関心が移っていくのは、

育、ことに家庭科教育と深い関連がある。

家庭科自体は、戦前は女性のみの教育で、戦後になって小学校・高校を通じて男女共修が実現するのは平成元（1989）年の学習指導要領改訂を待たねばならなかった。そうした中で、先に述べたような時代の必然性から、現在の家庭科における住教育分野は、非常に的を射た学習項目の設定とそれに応じた教科書の充実ぶりを見せるものとなっている。

## Education for Future Generations

授業時間の制約や、教師に専門性をもたせるための大学教育がなかなか追いつかず、教科書だけが充実していくこととのかい離が懸念される。そのため、学校外の専門家との協力体制が期待されることになる。

また、平成10、11（1998、1999）年の学習指導要領で「総合的な学習の時間」が登場したことも特筆すべきことである。環境・地域・福祉……といったキーワードで、教科書準拠ではなく学校の裁量に任される科目が作

られたため、建築士会、大学、公共団体、NPOといった外部支援者をゲスト・ティーチャーとして学校に招きやすくなった。このことも、学校における住教育に外部専門家の協力が導入されるきっかけとなったといえよう。

## 専門家のネットワークづくりが必要

こうした流れから、建築士や大工、インテリア・まちづくり・福祉・防災等の関係者まで、さまざまな分野の専門家が学校教育現場に入るようになってきた。しかし、それぞれが1、2回の授業を行うゲスト・ティーチャーで終わってしまうことが多い。そのため、せっかくの専門家による授業も、体系的なつながりをもったものにならないという現状がある。学習に対する呼び方も「住教育」「住まい学習」といったようにさまざまで、統一されていない。

### Case Study

#### 大阪市立住まいのミュージアム 町家の住人たちと体験する遊・職・住



大工さん役の学生と大工仕事を体験(2013年12月)。

かに触れることは、家づくりや住生活を支えるさまざまな職能の存在に気づく重要な機会にもなる。ひいてはキャリア教育にもつながる、重要な可能性を秘めている時間といえる。

こうした期待もあり、専門家による実践が各地でどのように行われているのかの実態把握と、その有機的ネットワークづくりは、今後おいに期待されることである。

## 地域や世代による違いを理解し、住文化を伝承する

平成14(2002)年には小・中・高校で学校週5日制が全面实施され、子どもが土曜日には基本的に地域にいくこともなくなった。文科科学省はその受け皿づくりの必要性を訴え、企業や

江戸時代の大阪を再現した町並みで、町家の住人たちの格好をしたボランティアと学生が、来館者に昔の暮らしかたを説明したり、一緒に体験してもらうイベントを開催。

そのためのチャネルづくりの一環として、たとえば大阪では、「大阪市立住まいのミュージアム(以下、住まいのミュージアム)」を使った活動が挙げられる。「住まいのミュージアム」は、都心部には古い住まいがほとんど残っていない大阪で、ビルの中に再現された江戸時代の町並みと昔の住文化に触れることができる施設である。ここで、70歳以上の高齢者を含むボランティアが、来館した小学生に掃除、障子の開け閉め、障子張りのしかたなど昔の住まいかたを指導している。このとき、大学生がボランティアから習い、彼らを通じて子どもたちに教えるという試みを実験的に行っている。大学生も昔ながらの住文化についてほとんど知らないため、彼ら自身の住ま

かたりテラシーの向上にもつながる。また、子どもを連れてきた母親たちも、核家族化の中で育った世代であるため、子ども以上に熱心であるという。

こうした活動は、地方・地域ごとに重点を変えて行われており、京都では、町家のような歴史的な姿を残すまちづくりに重点を、神戸市では阪神・淡路大震災後、耐震化の意識を高校生にしっかりと教えることに力を入れている。全国的にみると、火を扱ったことがない子どもが増えていることから、「マツチをつける」体験学習や、雑巾がけの体験学習なども、博物館等で多く行われている。

## 企業や行政による活動への期待

住教育分野では、

企業による貢献も大きい。最近では、積水ハウス、大和ハウス工業などのハウスメーカーが、家庭科や総合学習の時間に使えるようなDVD付きの参考書を作成している例もある。また、社員の建築士等を学校現場に派遣し専用の教材を使つての出張授業も行われている。例えば、3〜4回のシリーズ授業で、数人の小学生グループごとに1人ずつ建築士がつき、未来の学校を設計するといったワークショップ形式の授業を行う。子どもには難しい作業を

多様な価値観があることに気づくことが、最終的には主体的な住み手を育て、将来のまちづくりにもつながる。

建築士が手伝いながら模型を作るなどして、最後は発表会(講評会)で専門の目から講評が行われる。

今後は、大学生に対するインターンシップや体験学習を通して、企業の中の知能ストックを活かし、教育、ひいては社会に還元する機会を増やすことも期待されることである。

一方、住分野の研究・教育は、もともと気候風土の特徴がはっきりしている地域がリードしてきており、行政の取り組みとしては、北海道の北方建築

総合研究所による寒冷地住宅の住まひ方研究が知られていた。だが、最近注目されるのは、福井県の例である。地元福井の中で子どもたちを育て、やがて地域の市民として地域の住文化を受け継いでもらうことに力点を置いた取り組みのようである。このように、目的のはっきりとした住教育が評価されるようになってきた。

## まとめ

暮らしの中でも住分野は、本来さま

ざまな価値観が交錯する領域であり、さらに世代、地域、経済といった要素が複雑に関わってくる。

そのため、住まひに関する学習においては、なによりも、さまざまな住まひかたや住宅事情があるというところを理解し、それを許容する訓練が非常に重要である。多様な価値観があることに気づくことが、最終的には主体的な住み手を育て、将来のまちづくりにもつながるはずである。

また、一般に、人は学校で住教育を受けても、家を建てたり買うとき、結婚や子どもの誕生など、ライフステージにおけるある一定のイベントが起ころるまで、学んだ力をなかなか発揮できない。しかし、将来の生活設計まで視野に含めた日々の住まひの管理、住空間の快適性の追求と省エネへの配慮、まちづくりへの参加など、賢い生活者として日々住教育領域から学びとるべき要素は多いはずである。

次世代の住み手を育てるとともに、学んだことを生涯かけて活かせる、または学び直せるようなプラットフォームづくりが今後の期待がかかる。そして、そのための専門的な知識や体験をいかに有機的にネットワークしていくかが、今後の課題といえるだろう。

## 第九講

## 家庭や地域の創エネルギー

生活者にも取り組めるエネルギーづくり

生活者にも取り組むことができる  
エネルギー対策として、まず「省エネルギー」があります。  
次に、家庭で自らエネルギーを創り出す  
「創エネルギー」が挙げられます。  
今回は、この「創エネルギー」について、  
その代表である発電を中心に  
考えてみたいと思います。

## 創エネルギーとは

生活者自らがエネルギーを創り出す「創エネルギー（創エネ）」の代表は発電です。家庭で創る電気は分散型電源であり、3・11東日本大震災以降の電力不足対策に貢献することができます。

私たち生活者が家庭でできる創エネは2つに分類できます。1つ目は、「太陽光発電」のように、私たちのまわりの自然エネルギーを濃縮して利用する創エネ。2つ目は、「燃料電池」などのコージェネレーション。これは、沿岸部の大規模火力発電所では今まで海へ捨てていた排熱を、家庭ではその場で有効利用するもので、すなわち未利用エネルギーを価値化し、電気

下田 吉之 監修  
大阪大学大学院教授

当麻 潔  
大阪ガス株式会社エネルギー文化研究所研究員

と熱を利用する創エネです。

家庭に  
おける  
創エネルギー

Type 1

エネルギー濃縮タイプ

## 太陽光発電

太陽光発電は、発電時にCO<sub>2</sub>の排出や騒音がない、メンテナンスが容易、長寿命などのメリットがあります。一方、天候や日照に左右され出力が不安定、夜間は発電しない、発電効率が7〜18%と低く、製造コストが高いなどのデメリットもあり

ます。補助金や固定価格買取制度などにより、これまで家庭で最も導入されている創エネです。

## 太陽熱利用システム

太陽熱利用システムには、集熱器とお湯を貯める部分が完全に分離している「ソーラーシステム」と、集熱器とお湯を貯める部分が一体化された「太陽熱温水器」があります。天候や日照の影響を受けるというデメリットがありますが、エネルギー効率は40〜60%と高く、家庭の熱需要の省エネ推進のため今後さらなる普及が期待されます。

## バイオマス利用

家庭でできるバイオマスのエネルギー利用として、庭や近隣で発生する剪定枝等を燃料とする方法があります。この木質バイオマスは、燃焼によりCO<sub>2</sub>は発生しますが、樹木は太陽エネルギーを浴びて成長する過程で同量のCO<sub>2</sub>を吸収していることから、カーボンニュートラルといえます。剪定枝等を使用した薪ストーブは、暖房エネルギーの削減に大きく寄与します。体が温まるのはもちろんですが、燃える炎に心も温まります。

## 地中熱利用

地中熱は、季節を問わずほぼ一定(地下10mで約18℃)であり、夏は冷熱源、冬は温熱源として利用することができます。

Type 2

未利用エネルギーの価値化タイプ

## 燃料電池などのコージェネレーション

コージェネレーション・システムは、大規模火力発電所では発電時に捨ててしまう発電時の熱を、家庭で給湯や暖房に利用する(=経済的価値を付ける)ことができる高効率な分散型システムです。燃料電池の総合熱効率(発電+熱利用)は85%と高く(エネルギー講座第三講「102号74頁」参照)、大型火力発電所に匹敵する発電効率を達成する研究開発も行われています。

Table 1

## 再生可能エネルギー固定価格買取制度(FIT)のあらまし

電源	調達区分	調達価格※	買取期間	設備利用率	
Solar	10kW以上	37.80円	20年	12%	
	10kW未満(余剰買取)	38.00円	10年		
	10kW未満(W発電・余剰買取)	31.00円	10年		
Wind	20kW以上	23.10円	20年	20%	
	20kW未満	57.75円			
Geothermal	1.5万kW以上	27.30円	15年	80%	
	1.5万kW未満	42.00円			
Hydro	1,000kW以上30,000kW未満	25.20円	20年	60%	
	200kW以上1,000kW未満	30.45円			
	200kW未満	35.70円			
Biomass	ガス化 固形燃料燃焼	下水汚泥	40.95円	20年	80%
		家畜糞尿	40.95円		
		未利用木材	33.60円		
		一般木材	25.20円		
		一般廃棄物	17.85円		
		下水汚泥	17.85円		
		リサイクル木材	13.65円		

※調達価格(円/kWh:税込)

再生可能エネルギーの導入促進のために、「再生可能エネルギー固定価格買取制度」が2012年7月よりスタートした。買取価格や買取期間は、電源ごとに、事業が効率的に行われた場合に必要となるコストをもとに適正な利潤等を勘案し、中立的な「調達価格等算定委員会」の意見も参考にして決められる。設備利用率とは、発電設備の最大出力値に対して、実際に発電した発電量の比率を表す指標のこと。(右のデータは2013年度。出典:資源エネルギー庁「再生可能エネルギー固定価格買取制度ガイドブック」等)

Chart 1

### さまざまな再生可能エネルギーと創エネルギーへの取り組み

※再生可能電力=再生可能エネルギーで発電した電力

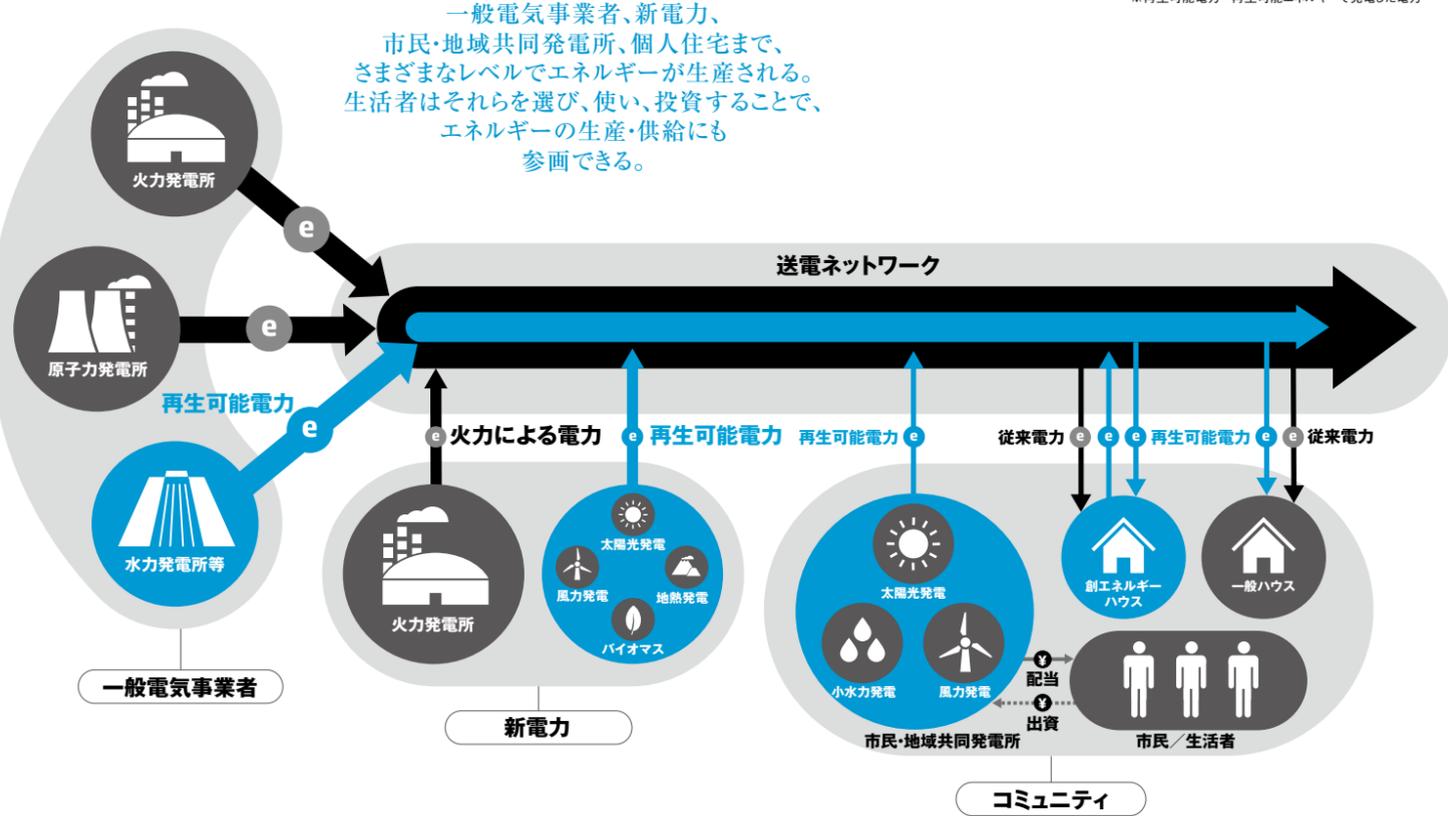
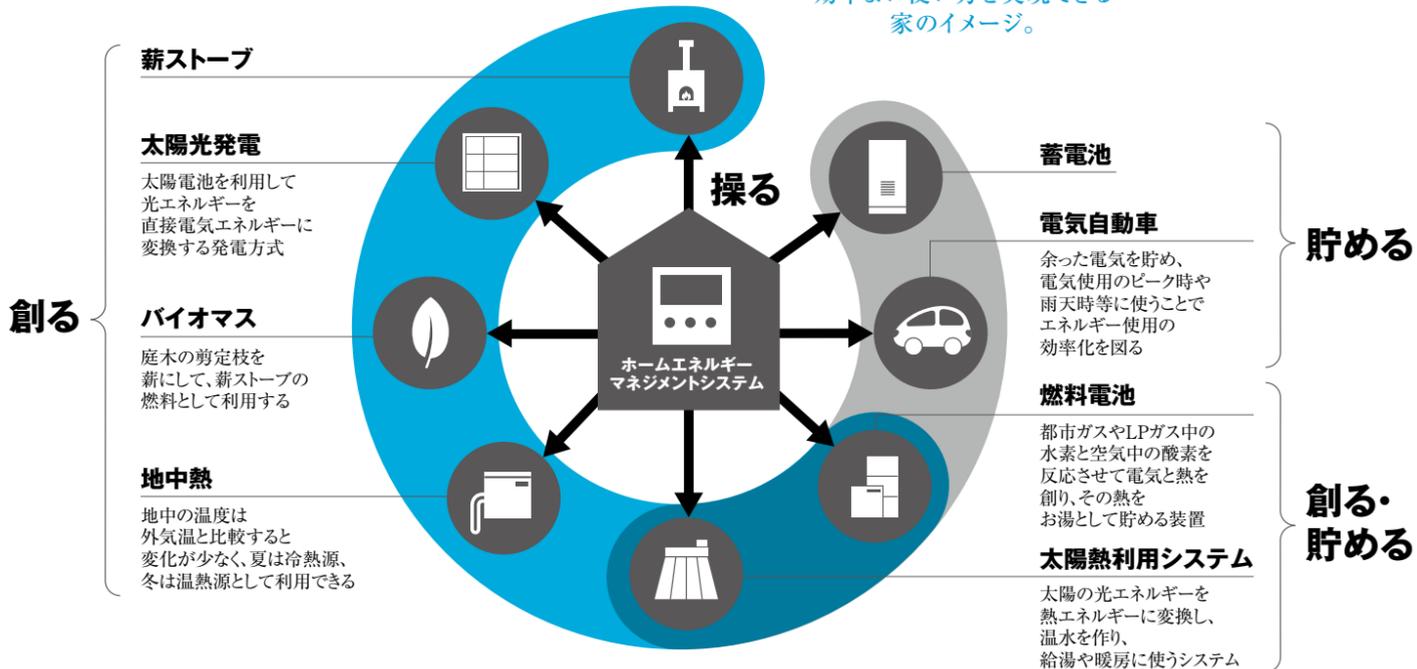


Chart 2

### 創エネルギーハウスの機能と設備

エネルギーを創り・貯める機能を、家庭内のさまざまな設備に振り分け、効率よい使い方を実現できる家のイメージ。



### 創エネには蓄エネとの組み合わせが必要

家庭での創エネは、エネルギーを貯める蓄エネルギー（蓄エネ）やエネルギー融通とうまく組み合わせることで、そのポテンシャルを最大限発揮でき、エネルギーを効率よく、無駄なく使うことができます。蓄エネでは、熱に関しては燃料電池や太陽熱利用システムでできたお湯を貯湯槽に溜め、お風呂の給湯など使いたいときに使うことが可能です。太陽光発電や燃料電池で創った電気が余った場合は、家庭用蓄電池や電気自動車（EV）やプラグインハイブリッド自動車（PHEV）の電池に貯め、自動車の動力にするほか、雨天や夜間の太陽光発電ができないときなどに使えます。蓄エネは、停電時の備え、節電・ピークカットにも貢献できます。課題としては、コスト、充放電時や蓄熱時のロス削減、寿命などが挙げられます。必要なエネルギーを上回るエネルギーが獲得できた際には、近隣におすす分けするエネルギー融通ができれば、蓄エネのようなロスが発生せず、効率的にエネルギーを使うことが可能となります。

### 地域における創エネルギー 市民・地域共同発電所への参画

2012年7月より再生可能エネルギーの導入促進のために、「再生可能エネルギー固定価格買取制度（FIT）」がスタートしています。発電した電気を電力会社が決められた価格で長期に買い取る制度で、電力会社が買い取るコスト負担は電気の利用者全員から賦課金という形で集められます。対象となる再生可能エネルギーは、「太陽光」、「風力」、「小水力（3万kW未満）」、「地熱」、「バイオマス」の5種類です（Table 1）。この制度により長期に安定的な収入が約束されることを受け、コミュニティで市民が出資して、再生可能エネルギーを活用した発電所（市民・地域共同発電所）を建設し、地域で創エネ

ギーに取り組みことができます。これは同時に地域活性化にも役立つと考えられ、市民の出資により、各地に、太陽光発電所、風力発電所、バイオマス発電所、水力発電所等が建設され、2013年3月末で約2300万kWが設備認定されています。

### 再生可能エネルギーの導入促進

再生可能エネルギーの導入促進策として自宅や市民・地域共同発電所での創エネがあります。この他に、近い将来、再生可能エネルギーで発電した電気を選択して購入することもできるようになります。電力の自由化が進められており、2016年には一般家庭でも電力会社を選ぶことが可能となる予定です。この改革により、従来の電力会社からだけではなく、風力発電やメガソーラー発電など再生可能エネルギーを活用して発電している新電力会社からの電力購入が可能となります（Chart 1）。

### まとめ

3・11東日本大震災以降の電力安定供給の危機を契機に、大規模集中エネルギーシステムを補完する分散型エネルギーシステムの有効性に注目が集まっています。需要家が自らエネルギーを創る創エネはまさに分散型です。電気を創る創エネだけでなく、家庭の用途別エネルギーの半分以上を熱需要が占めることから見て、熱を創る創エネも重要となってきます。

今、コミュニティ内で、市民・地域共同発電所が建設されており、創エネが自宅からコミュニティへと広がっています。今後、私たちは、自ら自宅やコミュニティでエネルギーを創り出し、再生可能エネルギーを含めたベストミックス・エネルギーを選び、自助・公助・共助として互助による停電時や災害時でも対応できるようなエネルギー安定供給システムの構築に、少しでも貢献したいものです。

### Column

### 持続可能なエネルギー社会構築に向けて

日本環境学会 前会長 和田 武



21世紀は、私たち市民や地域主体がエネルギーを創る時代になるでしょう。今後、普及が期待される再生可能エネルギーやコージェネレーションなどは、小規模分散型で多数設置する必要がありますが、市民や地域主体の取り組みに適しているのです。

ドイツでは、太陽光発電や風力発電など再生可能エネルギー発電が飛躍的に伸びていますが、その半分以上が市民や農民たちを中心に導入されています。デンマークでは総電力の30%以上を供給する風力発電の約80%が個人あるいは共同の地域住民所有です。また、コージェネ、バイオマス、太陽熱、地中熱などを活用する地域暖房システムを自治体や住民たちの地域暖房企業が経営して

り、人口の60%以上が加入するまで普及させています。両国での最近の再生可能エネルギーの飛躍的普及は、FITなどの実効性ある普及政策とともに市民・地域主導の普及方法が採られてきた結果です。

日本でも2012年7月からFITが施行され、住宅用太陽光発電や市民・地域共同発電所づくりもいっそう進み始めています。市民・地域共同発電所は全国各地に少なくとも458も作られています。今後、さらにそういう取り組みを促進する政策を採用し、私たち市民が主体的・積極的に取り組み、発電や熱利用での創エネルギーが促進され、環境保全、経済発展、エネルギー自給率向上、地域社会の活性化等の社会的影響をもたらす、持続可能なエネルギー社会の構築が可能になるはず

# 将来へ向けてのシナリオ

## 暮らしとエネルギーの過去・現在・未来

エネルギー講座のまとめとして、

暮らしとエネルギーについて、

昔(昭和の時代)を振り返り、現在の状況を再確認し、

そして将来(2050年)を想定します。

「ハイテクライフ」と「スローライフ」の二つのシナリオを示し、

皆さんと一緒にこれからの暮らしとエネルギーについて

考えたいと思います。

### 下田 吉之 監修

大阪大学大学院教授

### 当麻 潔

大阪ガス㈱エネルギー文化研究所研究員

## 昭和の時代の暮らしとエネルギー

昭和の初期の暮らしは、家電製品は、裸電球とラジオだけ、家事は手作業(手洗い、ほうきとはたき、ぞうきんがけ)、空調は「うちわ」と炭火を入れた「火鉢」そして薪で沸かしたお湯を入れた「湯たんぽ」というように、ほとんどエネルギーを使いませんでした。したがってその当時の電源は、水力発電でほとんど賄うことができ、石炭や石油をわずかしかなかった「水主火従」でした。家庭の燃料は「薪」や「木炭」であり、今から見ればこの時期は、再生可能エネルギーが中心の「少エネ」の時代であったといえます。

1950年代半ばから日本は高度経済成長長期に入り、人口増加と相まってエネルギー消費量が増加しました(Chart 1、

## 現在の暮らしとエネルギー

その後、家庭には複数のエアコンやカラーテレビ、温水洗浄便座等多くの家電製品が普及していきます。さらに、お風呂、台所、洗面所の3

カ所給湯が普及。床暖房や衣類乾燥機、食器洗浄乾燥器なども登場し、豊かな、ある意味では贅沢な生活を送るようになりました。その結果、世帯あたりの人員の減少と合わせて1人あたりのエネルギー消費量は大きく増加。とりわけパソコンや携帯電話などのICT機器や調理家電、「個電」といわれるパーソナルユースの製品の普及などにより、今や家庭のエネルギー消費量の約5割を電気が占めるようになって

Chart 2)。電源も、石油・石炭火力発電が増え、1963年に初めて「火主水従」に移行した後、当時安価だった石油火力を中心に供給力を高めていきます。家庭では、三種の神器と呼ばれたテレビ、洗濯機、冷蔵庫の3種類の家電製品が急速に普及して電気の消費量が増加。また、それまで銭湯に通っていたのが、ガス風呂釜の登場により内風呂が普及し、瞬間湯沸かし器によって台所でもお湯を使うことが可能となり、ガスの消費量も増加しました。そして、1973年の第一次オイルショックを契機に、省エネの技術開発が促進され、生活者の省エネ意識も向上しました。また、脱石油政策のもと、原子力、石炭、LNGなどの石油代替電源の開発や、天然ガスへの都市ガスの原料転換が進められました。

ています。そのため電力供給は、地球温暖化対策をにらんで原子力を主軸に、天然ガス火力を組み合わせる一方、再生可能エネルギーの積極的導入を図ろうとしていました。

ところが、3・11の東日本大震災を契機に、原子力発電所が停止し、天然ガスを中心とした火力発電所でその停止分を補完する事態となりました。昭和初期の再生可能エネルギーの時代から、石油の時代、多様化の時代を経て、低炭素エネルギーの時代を指向していたのに、短期的にはふたたび化石エネルギーの時代に逆戻りしたかのように見えます。しかしよく見ると、原子力を補完している天然ガスの利用拡大が進み、一方、大規模集中システムへの信頼性の揺らぎから、小規模分散型シス

これまで日本の総人口増加と相まってエネルギー消費量(=供給量)は増加してきた。特に、1950年代半ばからは日本が高度経済成長長期に入ったことにより、急な増加を示している。今後、人口減にともない、エネルギー消費量の削減も期待される。

Chart 1: 日本エネルギー経済研究所「エネルギー・経済統計要覧2013」より / Chart 2: 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」より

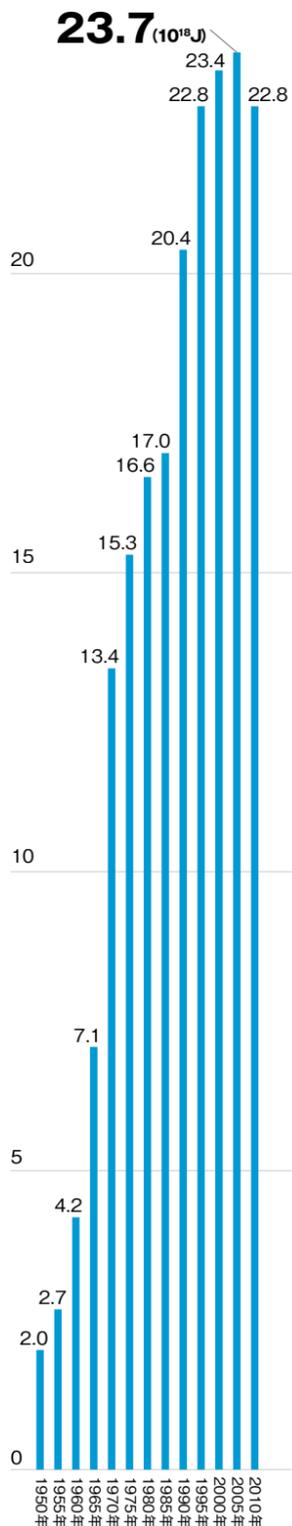


Chart 1  
時代とともに  
変わる  
一次エネルギー  
供給量

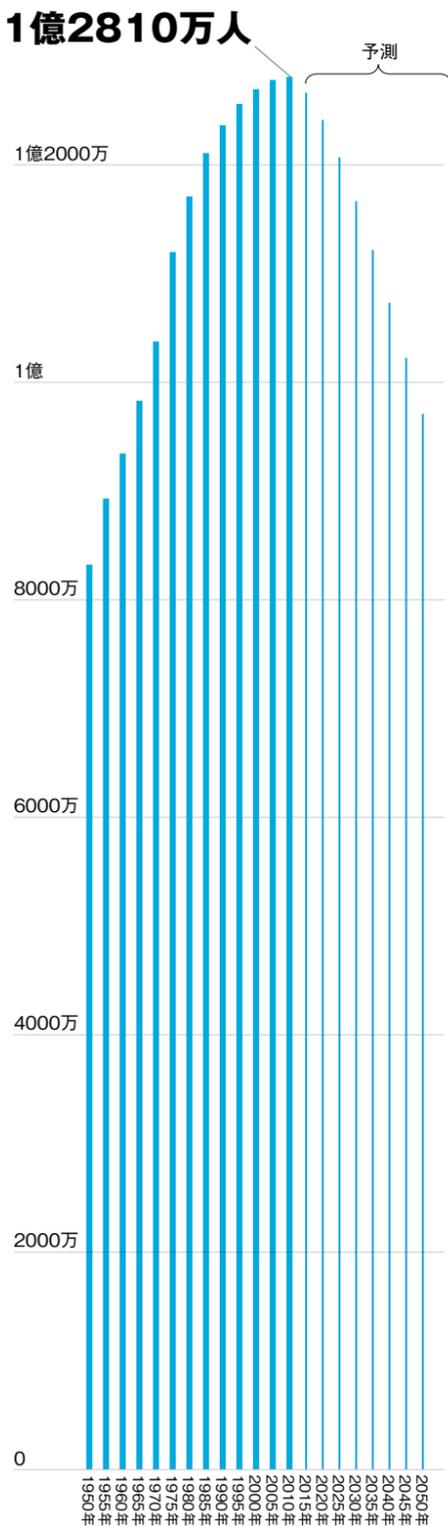


Chart 2  
日本の総人口の推移

1億2810万人

1億2000万

1億

8000万

6000万

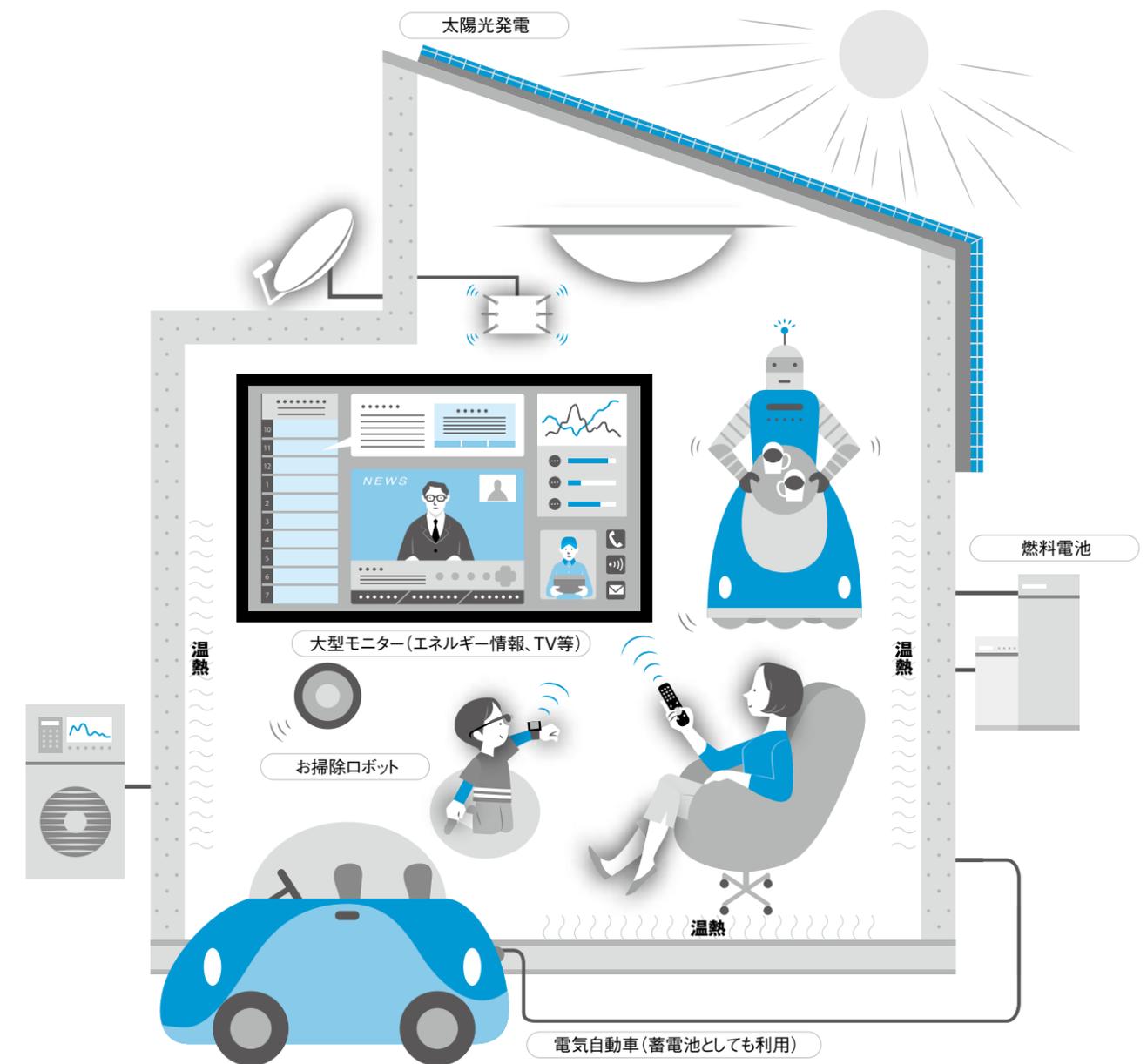
4000万

2000万

0

予測

今から約40年後の2050年を想定した二つの将来シナリオ。  
100億人に近づくことされる世界の総人口と途上国の経済成長、  
それともなう地球温暖化の進行。  
こうしたことを視野に入れながらエネルギーと上手に付き合っていく  
ライフスタイルの選択が必要とされます。



イラスト／金子真理

## スローライフ

Slow Life

- ・効率を追求する「ハイテクライフ」とは対極の「スローライフ」。昔に戻り、自然共生住宅で、再生可能エネルギーを最大限活用し、エネルギー消費機器は必要最低限の所有とし、物理的な豊かさよりも、心の豊かさの向上を図るケース。
- ・無駄な消費に敏感になり、浪費しな

いさわやかさを感じ、今までとは違った価値観が醸成され、楽しく心豊かになる「エコライフ」に変わっていきます。

- ・庭には樹木が茂り、家庭菜園があり、土に触れ、天候や害虫などの自然と接し、自給率向上も実現します。手間をいとわず、手間を楽しむライフスタイルです。

## ハイテクライフ

High Technology Life

- ・現在の豊かな暮らしがさらに向上し、より便利で快適な住環境で、地球温暖化や環境問題を意識しなくても、高度な技術とそのマネジメントシステムにより、さまざまな問題に対処できます。
- ・高断熱住宅、高効率機器、ロボットなどの新たな機器、エネルギー・マネジメントシステム等ハイテクに囲まれ

た便利で快適な生活が実現します。

- ・快適性向上のため、エネルギー消費機器が大型化、新たな機器も増加し、現在の技術ではエネルギー消費量が増加します。革新的な技術開発によりエネルギー消費量の大幅な削減を行い、資源制約、環境制約を乗り越えることが必要です。

テムとの組み合わせに関心が高まっています。それにともない消費地で電気と熱を同時に創って利用するコージェネレーションが注目を浴び、また、再生可能エネルギー固定価格買取制度の導入により、太陽光発電を中心に再生可能エネルギーの普及が加速しています。

加えて、これまでは供給側のみで電力供給システムを構築・運用していたものを、ICTの活用で能動的に需要側の電力消費を調整し、需給バランスをとって、効率的な運用を実現するデマンドレスポンスや、エネルギーの見える化により省エネを行うエネルギー・マネジメント・システム（家庭用：HEMS、ビル用：BEMS）が導入され始めました。

高度成長時代から震災まで、安かった石油が高くなって省エネや石炭、天然ガス等の代替エネルギーで供給を確保した時代を「再生可能エネルギーの時代」と呼ぶならば、震災直後の今は、（緊急避難的に火力・LNGシフトが起こっているもの）これまでのベストミックスからこれからのベストミックスへ転換を模索する移行期と呼べるでしょう。そしてそれを後世から見ると、まさに今こそが再生可能エネルギーの時代に帰するターニングポイントであったということになるのかもしれない。（Chart 4）

## これからの暮らしとエネルギー

2013年9月末にIPCC（気候変動に関する政府間パネル）の第5次評価報告書の第1作業部会の報告が発表されました。地球温暖化は疑う余地がなく、それは人間活動が主要な要因であった可能性が極めて高いとされ、地球温暖化を制限するためには、温室効果ガスの排出量の大幅かつ持続的な削減が必要とされています。世界の人口は増加し、2050年には100億人に近づき、途上国の経済成長を考慮すると、このままでは地球温暖化が今後さらに進行するのは明らかであり、温室効果ガス特にCO<sub>2</sub>の大幅な削減は必須です。

2050年のエネルギーはこうなっているのでしょうか。3・11東日本震災を契機に、わが国のエネルギー政策は大きく変わろうとしています。太陽光、風力、バイオマスなどの再生可

能エネルギーの導入が促進され、非常に大きなウェイトを占められると思われま

す。では、これからの暮らしはどうなるのでしょうか。今から約40年後の2050年を想定してみます。二つの将来シナリオを考え、Chart 3として表してみました。

「ハイテクライフ」のケースでは、ロボットなどの新たな機器に囲まれた、より快適で豊かな暮らしが実現します。それらの機器と、燃料電池や太陽光発電の創エネ、電気自動車や蓄電池の蓄エネが、ICTによって最適にコントロールされます。

一方「スローライフ」のケースでは、昔に戻って、自然の風、熱、光、木などを最大限取り入れます。また、家庭菜園で野菜を作るなど体を動かかし家事を行うことで、心豊かに暮らすことができます。

## Column

### 連載終了にあたって

2012年7月以来連載してきた「エネルギー講座」ですが、今号で予定の10講に達し、ひとまず終了となりました。

連載開始時には「現在我が国が直面するエネルギー問題においては、市民一人ひとりが正しい情報のもとに、合理的な判断と選択を行うことが何よりも必要となっている。そのためには、エネルギーリテラシー（エネルギーを賢く使うための基礎知識）を身につけることが重要である。」と書かせていただきましたが、この間、原子力発電所の再稼働に関する議論に始まり、2012年夏の電力需給の逼迫、エネルギー価格の高騰、エネルギーに関する法制度の改革などエネルギーをめぐる社会的関心の高い出来事が続き、この思いをいっそう強くしています。

生活の中で身近に接する「水」「物質（ごみ）」「エネルギー」の中で、エネルギーは「見えない」ことが大きな特質であり、その性質ゆえ、私たちの日々の行動がどのようなエネルギーによるサービスとつながり、どれだけのエネルギーを消費し、それがどのような資源から創造され、環境にどのような影響を与えているのかを感



Shimoda Yoshiyuki

じ取ることには大変難しいことです。今回の第十講に示されているように、私たちの暮らしとエネルギーの関係はこの100年ほど（人類の文明の長い歴史からすればほんの一瞬の間）で大きく変化し、環境に対してより大きな影響をおよぼすようになっていきますが、それを日々の生活の中で実感することは困難です。また、連載中にも記述がりましたが、市場の「自由化」は消費者にとってはチャンスであると同時に「責任」を負うことにもつながります。また、選択の幅が広がる中で、環境への影響を考え、地球に暮らす一員として将来世代に対して責任ある選択を行うことも消費者に委ねられます。

この連載の執筆者、コメントを寄せていただいた各位、連載を企画され、編集に携わられたCEL関係者の皆様の努力により、わかりやすい講座にすることができました。エネルギーをめぐる社会の変化、技術の変化の中で、今回ご紹介したような内容は時々刻々変化していくものと思われま

すので、今後もその時代に応じた「エネルギー講座」が書かれるのが望ましいと考えております。

日本の電源別発電電力量の変化を、時代の推移にあわせて図示した。高度経済成長期、第一次オイルショック、2011年の東日本大震災等が変化の契機となっていることがわかる。

Chart 4

### 時代とともに変わる電源構成 (イメージ図)



資源エネルギー庁「エネルギー白書2013」、電気事業連合会の資料などに基づき作成した。

皆さんはどちらのケースを選択されるのでしょうか？

## 最後に

3・11東日本大震災以降、わが国のエネルギー政策は大きく変わろうとしています。省エネルギーの推進、再生可能エネルギーの導入促進、平時の省エネと災害時のセキュリティ確保に貢献する分散型エネルギーシステムへの期待、原子力問題、電気・ガス事業制度改革等、エネルギーは国の問題であると同時に、私たちの問題でもあります。2年間連載してきたこのエネルギー講座をベースに、講演、ウェブサイトでエネルギー・リテラシー向上活動をさらに進めていきたいと思っています。皆さんも、エネルギーに関心を持ち、そのリテラシーを向上させ、正しい判断と選択をされることを期待しています。

大阪大学大学院教授 下田吉之

# タテ・ヨコ・ナナメ

大阪ガス(株)  
エネルギー・  
文化研究所 所長

## 木全 吉彦

Kimata Yoshihiko

Culture,  
Energy  
&  
Life

# CEL

Volume 106 March 2014

特集／ソーシャルって何？  
平成26(2014)年3月1日発行  
頒価／1,000円(送料別途)

### 発行

大阪ガス(株)  
エネルギー・  
文化研究所(CEL)  
〒541-0046  
大阪府大阪市中央区  
平野町4-1-2

### 発行人

木全吉彦

### 企画・制作

豊田尚吾

### 編集人

西田裕一

### 編集

(株)平凡社

### Art Director

岡本一宣

### Design

岡本一宣デザイン事務所

### 校正

(株)アンデバンダン

### DTP制作

(有)タイワコムズ

### 印刷・製本

(株)東京印書館

### お問い合わせ窓口

大阪ガスビジネス

クリエイト(株)

TEL 06-6205-4650

FAX 06-6205-4759

CEL@ogbc.co.jp

Research Institute for  
Culture, Energy and Life  
©2014 OSAKA GAS CO., LTD

※禁無断転載複写※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌・バックナンバーのコンテンツやエネルギー文化研究所(CEL)の活動内容は、インターネットホームページでご覧いただけます。

<http://www.osakagas.co.jp/company/efor/cel/>

# 恵みの季

Kino Megumi  
From Spring  
to  
Early Summer



シイタケ

## 椎茸

Shiitake Mushroom

300種類ある、と言われている食用キノコのうち

栽培技術が確立しているのは20種ほど。

椎茸の人工栽培開始については

諸説あるが、概ね17世紀頃。

したがって、季節の影響を受けにくい。

それでも秋の椎茸をひと冬干して、

春にいただくことをお勧めする。

傘の内側を日に当てる。

これは家庭で簡単にできること。

その椎茸が、冬の間滞った代謝を活性化させ、

血液の濁りを取り除いてくれる。

名のある料理を作るより、はるかに効果的だ。



## 紫蘇

Perilla

縄文時代の遺跡から種が出土した例があり、

来歴の古さを物語っている。

品種は多数。青、赤、片面、縮緬など。

漢方では、殺菌、解毒、去痰で知られる。

人体に必要な栄養素の殆どを備えている。

特に多く含まれるロズマリン酸の働きが、素晴らしい。

抗酸化作用を促し、アレルギーをよく抑え、糖の消化を妨げる。

香りには、精神を安定させる成分も含まれる。

細胞の一つ一つに効く。

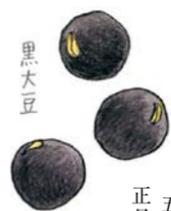
蘇る、という字の何と相応しいことか。

これを薬味として用いた先人の智慧に、

手を合わせる。

## 黒大豆

Black Soybean



黒大豆

冬は汗をかきにくい。

そこへ年末年始の食生活。

これを進んで取り除きたい。

春先に大陸から流れてくる

湿った空気は皮膚呼吸を遮り、代謝を鈍らせる。

この湿った感じが気分を重くする。

五月病や鬱病が春先に多いのは、そのせいだろう。

正月に黒豆を食べるのは、ゲン担ぎばかりではない。

体のフィルター、腎臓の働きを助けて

水滯を除く。黒豆も薬である。

品種には和知黒、丹波黒、紫ずきん、

作州黒などがある。

## 代謝を促し、 体調を整える

春から初夏へ

東洋医学では、春から初夏にかけてみられる

アレルギーや鬱症状は、冬の間体の代謝が滞った結果、

原因と説明しています。大地の恵みを十分にいただき、

暑い夏へ向けて体調を整えたいものです。

## ゴボウ

Burdock



ゴボウ

アンチエイジングに最も効果があるのは、排泄だろう。

有毒物質は、早く外に出した方がよい。

余分な水、古血、その他の老廃物など。代謝の滞りやすい冬。

春の訪れとともに、これらを体の外に出すよう心がけたい。

ゴボウはそれを助けてくれる代表的食物。

ところで根は栄養的価値に乏しいのだが、

「八尾若ごぼう」で知られる薬ゴボウなどは、

根よりも茎、葉の方が多く、ルチンやβ-カロテンなどを、

緑黄色野菜並みに含む。

ゴボウは体を冷やす作用もあるので

温かい料理をお勧めする。

### 文・三浦俊幸

料理人、野菜農家。  
中医学や東洋医学と  
食事との融和を実践  
東京・六本木で和食  
店「さだ吉鑑(かす  
がい)」を経営、故郷  
の長野県では野菜を  
作り注文販売を行う。

### 画・川口澄子

画工。日常に潜む非  
日常の可笑しみを観  
察し画帖に描きとめ  
る。著書に「旧暦ラ  
イフ温故知新」など。  
三浦氏との共著に「七  
十二候美味禮讃」。

